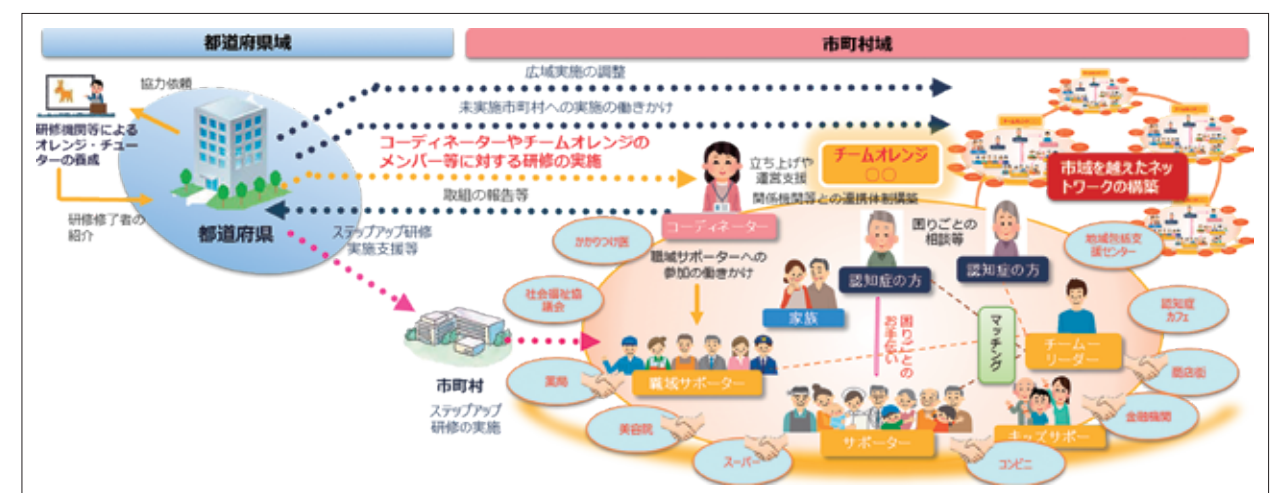


認知症になっても
安心して暮らし続けられる
地域づくりに向けて

本冊子作成の背景

- 令和元年度以降の認知症施策は、令和元年6月に策定された「認知症施策推進大綱」（令和元年6月認知症施策推進閣僚会議）を基本として展開されています。認知症施策推進大綱の基本理念は「共生と予防」であり、共生を進めるためには地域支援体制の強化が必要であり、そのための具体的な方策の一つとして「チームオレンジ」を地域ごとに構築することが位置付けられています。
- 「チームオレンジ」とは、「認知症と思われる初期の段階から、心理面・生活面の支援として、市町村がコーディネーターを配置し、地域において把握した認知症の人の悩みや家族の身近な生活支援ニーズ等と認知症サポーターを中心とした支援者をつなぐ仕組み」であるとされています。国の具体的な施策としては、令和2年度より地域支援事業の認知症総合支援事業に「認知症サポーター活動促進・地域づくり推進事業」として位置付けられています。
- 2025年には700万人が認知症になると試算されており、既に私たちは「認知症がごく当たり前の社会」「認知症とともに歩む時代」に生きています。このような社会・時代においては、介護保険などのフォーマルな制度だけではなく、インフォーマルな支え合いの仕組みづくりが必要になります。インフォーマルな支え合いの仕組みづくりは、認知症とともに誰もが安心して暮らし続けられ、本人や家族がいきいきと、自分らしい生活を送れる地域づくりにもつながるものです。
- チームオレンジは、本人と共に、地域の社会資源を活かしたインフォーマルな支え合いの仕組みづくりを行う一つの手段であり、本人がどんな暮らしをしたいか、それを起点につくりあげるものです。地域の本人や家族のニーズ、社会資源の状況に応じて、チームオレンジには多様な形が考えられます。実際に各地域では本人や家族と共に活動する多様なチームオレンジが広がっています。
- 本冊子は、各地域で広がる多様なチームオレンジの活動事例や行政の担当者がチームオレンジの整備を進めていく際に、疑問に思うこと、不安に思うことについて、ヒントとなる考え方や知恵を整理しています。
- 本冊子が、チームオレンジの整備に取り組む際の一助となれば幸いです。



資料：厚生労働省「チームオレンジの取組の推進」

本冊子の構成

- 本冊子の第1章「各地域で広がる多様なチームオレンジの活動」では、各地域で広がる多様なチームオレンジの活動について、本人や家族の希望や思いに寄り添った事例を中心に19の市町村の事例を掲載しています。活動の特徴等に鑑み、ご自身の市町村に参考になりそうな事例を参照してください。
- 第2章「活動のヒント」では、行政の担当者がチームオレンジの整備を進めていく際に、疑問に思うこと、不安に思うことについて、ヒントとなる考え方や知恵を整理しています。

はじめに

本冊子作成の背景	1
本冊子の構成	2

本人・家族からのメッセージ

第1章 各地域で広がる多様なチームオレンジの活動

「チームオレンジ」として

新たに団体や活動等を立ち上げた事例

- 群馬県玉村町
- 埼玉県入間市
- 東京都清瀬市
- 愛知県瀬戸市
- 島根県浜田市

以前から地域にあった団体や活動等を「チームオレンジ」とした事例

- 北海道北広島市
- 岩手県矢巾町
- 栃木県佐野市
- 千葉県千葉市
- 神奈川県平塚市
- 石川県小松市
- 長野県駒ヶ根市
- 静岡県静岡市
- 静岡県沼津市
- 静岡県藤枝市
- 愛知県豊明市
- 大阪府門真市
- 奈良県三郷町
- 島根県松江市

第2章 活動のヒント

本人・家族からのメッセージ

本人からのメッセージ

一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ
代表理事 藤田 和子

チームオレンジには多様な形がありますが、どのような活動を行う場合も「本人のためのチームオレンジ」という視点を大切にしたいと考えています。チームオレンジでの活動を通じて、本人が「楽しい」「心地よい」「自分が大切にされている」といった気持ちを持てることが重要です。そのためには、制度や仕組みありきで、チームオレンジに本人をあてがうのではなく、本人の思いや願いを引き出しながら、本人とともに、チームオレンジを作り上げていく必要があります。

時折、「チームオレンジに参加してくれるような活動的な本人が地域にいない」との声を聞くことがあります。しかし、チームオレンジは積極的に自分から発信を行う活動的な本人のためだけのものではありません。本人の周囲の方とも連携しながら、本人の思いや願いを丁寧に引き出すことで、どのような状態や環境にある本人の周りでもチームオレンジを構築することはできます。

依然として、本人は「支援される一方の存在」という先入観が、行政や地域社会に存在することが多いように感じます。チームオレンジでは、本人が他の本人や地域住民等を支援することもあります。チームオレンジでの活動を通じて、そのような先入観が変わっていくことを期待しています。

本人のためのチームオレンジが全国に広がることで、1人でも多くの本人が、楽しく、そして心地よい関係性の中で、自分らしい生活を送れることを願っています。

家族からのメッセージ

公益社団法人 認知症の人と家族の会
副代表理事 埼玉県支部代表 花俣 ふみ代

チームオレンジは、本人や家族、そして行政、地域住民等が「支援する人、される人」の関係をを超えて、ともに活動し、誰もが安心して自分らしい生活を送れる地域づくりを行うための取組であると考えています。このように考えると、チームオレンジは単なる認知症施策ではなく、地域共生社会の実現をけん引する取組であると言えます。

チームオレンジの実践のあり方は画一的なものではありません。本人の思いや地域の特性等を考慮しながら、地域にあったチームオレンジのあり方を参加するメンバーがともに考えていくことが重要です。チームオレンジの構築は本人とともに進めるものですが、本人を「お客様」扱いするのは避けるべきです。「誰かに何かを一方的にしてもらう場所」というのは本人にとって必ずしも居心地が良い場所ではありません。本人と「ともに」という言葉を大切に、チームの一員として本人が主体的に参加できることを期待しています。

チームオレンジは立ち上げて終わりではありませんし、最初から全て上手くいくわけではありません。活動を通して、ともに学び、ともに成長していく、そのような姿勢も重要だと思います。本人がやってみたいことをどうやって実現するかを一緒に考えることは、本来とても楽しいことです。本人と「ともに活動すること」、そして、チームオレンジを「楽しむこと」を大切にしながら、各地域で活動を進めていただけることを願っています。

第1章 各地域で広がる多様なチームオレンジの活動

「はじめに」でも記載の通り、本冊子の第1章「各地域で広がる多様なチームオレンジの活動」では、各地域で広がる多様なチームオレンジの活動について、本人や家族の希望や思いに寄り添った事例を中心に以下の19の市町村の事例を掲載しています。

事例は立ち上げの経緯に着目し、「チームオレンジ」として新たに団体や活動等を立ち上げた事例と以前から地域にあった団体や活動等を「チームオレンジ」とした事例の2つに大別しています。

活動の特徴等を鑑み、ご自身の市町村に参考になりそうな事例を参照してください。

「チームオレンジ」として新たに団体や活動等を立ち上げた事例

自治体	群馬県玉村町	→ P6
活動の特徴	一人ひとりの希望に寄り添う本人を中心としたチームオレンジ	
自治体名	埼玉県入間市	→ P8
活動の特徴	3つの班に分かれて話し合いながら取り組むチームオレンジ	
自治体名	東京都清瀬市	→ P10
活動の特徴	空き家を活用したサロン活動を通じて、「支援する人、される人」を超えた共生の地域づくりを実践するチームオレンジ	
自治体名	愛知県瀬戸市	→ P12
活動の特徴	本人の「やりたいこと」とサポーターの「できること」をマッチング サポーターと一体となって取り組むチームオレンジ	
自治体名	島根県浜田市	→ P14
活動の特徴	転々とせず住み続けられる、マイペースに生活ができることを目指し、地域住民の思いを実現するチームオレンジ	

(注) 事例に掲載している情報について
人口及び高齢化率は、【住民基本台帳】の令和4年1月1日時点のデータを掲載
その他の記載内容は令和4年度に実施したアンケート調査及びヒアリング調査で確認した事項を掲載

以前から地域にあった団体や活動等を「チームオレンジ」とした事例

自治体	北海道北広島市 ^(※)	ベースにした活動	見守り	→ P16
活動の特徴	本人・サポーター・地域住民が「支援する・される」の関係性を超え、仲間同士で繋がり合いながら気軽に参加できるチームオレンジ			
自治体	岩手県矢巾町	ベースにした活動	生活支援、認知症カフェ、見守り	→ P18
活動の特徴	既存のボランティア団体を結び付け、多方面から本人・家族を支えるチームオレンジ			
自治体	栃木県佐野市	ベースにした活動	認知症カフェ	→ P20
活動の特徴	様々な人と人がつながり、地域のことをより深く知り、ともに考え本人・家族の生活をアシストするチームオレンジ			
自治体	千葉県千葉市	ベースにした活動	認知症カフェ	→ P22
活動の特徴	認知症カフェを起点として、本人の希望を実現する活動や本人・家族のための交流を実施するチームオレンジ			
自治体	神奈川県平塚市	ベースにした活動	生活支援	→ P24
活動の特徴	認知症も含めた地域の困りごとを解決するチームオレンジ			
自治体	石川県小松市	ベースにした活動	専門職向け研修	→ P26
活動の特徴	「とことん当事者」を合言葉に養成されたマイスターが本人・家族とともに地域で活躍することを目指すチームオレンジ			
自治体	長野県駒ヶ根市	ベースにした活動	認知症カフェ、通いの場	→ P28
活動の特徴	共生の「地域づくり」と認知症になっても“仲間”としてともに活動できる「場づくり」を実践する住民主体のチームオレンジ			
自治体	静岡県静岡市 ^(※)	ベースにした活動	通いの場、見守り	→ P30
活動の特徴	“チームの立ち上げ”に重点をおいた自治体からのサポートとそれに応えた地域住民による認知症にやさしいまちづくりに向けたチームオレンジ			
自治体	静岡県沼津市	ベースにした活動	認知症カフェ	→ P32
活動の特徴	地域包括支援センターの取組をサポートするチームオレンジ			
自治体	静岡県藤枝市	ベースにした活動	企業認証制度	→ P34
活動の特徴	地域のお店や事業所が立場を超えてともに考え・実行する、認知症の人とともに暮らしやすい地域づくりを行うチームオレンジ			
自治体	愛知県豊明市	ベースにした活動	生活支援	→ P36
活動の特徴	住民互助の支え合いの仕組み「おたがいさまセンターちゃっと」を母体とするチームオレンジ			
自治体	大阪府門真市	ベースにした活動	認知症カフェ、通いの場	→ P38
活動の特徴	認知症になっても輝けるまちをめざして、認知症の人が活躍する場や活動を多様な人や団体と共に創り、「認知症の人が支えられる側から地域をつなぐまちづくりの主人公へ」となるチームオレンジ			
自治体	奈良県三郷町	ベースにした活動	生活支援	→ P40
活動の特徴	認知症になっても参加し続けることのできる集いの場を目指すチームオレンジ			
自治体	島根県松江市	ベースにした活動	認知症カフェ	→ P40
活動の特徴	「白衣を着ていない専門職」がはじめた“人とのつながりを感じられる”「ごちゃまぜ」な場づくりを実践するチームオレンジ			

(※) 新たに立ち上げたチームオレンジも含む。

群馬県玉村町

一人ひとりの希望に寄り添う本人を中心としたチームオレンジ

■群馬県玉村町では、本人・家族からの要望に基づき、本人を起点として、本人と顔見知りの関係にある方をメンバーとしたチームを設置している。

■チームの設置にあたっては、まずは、本人・家族から活動に関する希望や個人情報取り扱いに関する同意等を確認する。その後、本人が暮らす地区のサポーターを対象としてチーム員を募集し、本人・家族・チーム員・行政が協力してスマイルプラン（活動計画）を作成し、活動に取り組んでいる。

■本人の症状の進行や希望する活動等の把握を心がけ、家族やチーム員と情報共有をするほか、必要に応じてケアマネジャーや医療専門職等とも連携しながら、一人ひとりの希望に寄り添った活動を行っている。



八幡原認知症カフェギター



皆でタスキを掛けて見守りウォーキング



理学療法士さん（左）もボランティアで参加

基本情報

人口	3.6万人	高齢化率	26.5%
チーム数	3チーム	担当部署	健康福祉課 高齢政策係
チームの構成	メンバー数は22名 本人、家族、本人と顔見知りのメンバー等で構成		
行政の推進体制	行政では、健康福祉課担当者、チームオレンジ・コーディネーター等が主体となり推進。また、以下と連携している。 ・認知症地域支援推進員 ・地域包括支援センター ・地域の認知症カフェ ・認知症初期集中支援チーム ・協議体（生活支援体制整備事業）		

第1章 各地域で広がる多様なチームオレンジの活動

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

認知症本人や家族が、地域とのつながりを持ち、安心して希望ある生活を送れること（孤立化の防止）

活動内容

各チームが本人の希望に寄り添ってスマイルプラン（活動計画）を定め、それぞれの活動に取り組んでいる。

- チームオレンジ下新田第一
本人も担い手として、一人暮らしの高齢者宅へ訪問する見守りウォーキング、屋外での筋力トレーニング、草刈り等の生活支援を行うお助け隊の活動を実施している。メンバー数は10名。
- チームオレンジ上飯島第一
下校時の小学生に対する校門での声かけ活動や見守りウォーキング、筋力トレーニング等の居場所活動を実施している。メンバー数は5名。
※現在本人の活動は、症状が進行し休止中
- チームオレンジ八幡原
認知症カフェを基盤とした地域の公民館での活動を実施している。メンバー数は7名。

チームオレンジの設置に至ったプロセス

本人・家族からの要望を受け、顔見知りの関係にある方をメンバーとしたチームを設置

- 地域包括支援センターの相談業務の中で、本人・家族から「チームオレンジがあると良い」とのニーズを把握した。そこで、サポーター起点ではなく、本人を中心とし、本人と顔見知りの関係にある方をチーム員としたチームを設置した。

本人・家族の関わり状況

丁寧なアセスメントをふまえて活動内容を定め、本人も役割をもって参加

- 本人・家族へアセスメントし、希望する活動の確認と個人情報取り扱いの同意を取得する。そして、本人・家族・チーム員・チームオレンジ・コーディネーター・行政と一緒にスマイルプランを作成する。本人は役割を持ち、時に担い手として、仲間とともに希望する活動を行う。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

そのときの症状やニーズに応じて、本人にとっても、チーム員にとっても無理のない活動を実施

- 認知症の進行によって参加が困難となる場合や、参加意向があっても本人と家族・チーム員の間に温度差生じることがある。随時チーム員や家族、チームオレンジ・コーディネーター等関係者で希望する活動内容や本人の状況を共有し、お互いに無理のない活動となるよう心がけている。

行政の役割

チームの状況を把握し、家族や関係者と情報を共有
チーム同士が交流できる
チームオレンジ
情報交換会も開催

- チームの活動に時々参加してニーズの変化や本人の症状の進行等を把握し、できるだけ家族と情報共有するほか、必要に応じてケアマネジャーや医療従事者等とも連携している。
- 行政への要望の把握やチーム同士の交流を目的としたチームオレンジ情報交換会を開催している。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 本人と地域とのつながりを保つことができ、本人からも「いつもの仲間と一緒に活動できるのが嬉しい」といった声を受けている。
- チーム員のスキルやモチベーションも向上しており、単に本人を支えるという目的ではなく、「いつ自分も認知症になるかわからない。この活動は自分のためにもなっている」といった声も受けている。

今後の展望・課題

- 地域に多くのチームがあると良いと考えている。チーム立ち上げ初期に丁寧な聞き取りや同意の取得が必要だが、それ以降はチームごとに自走していく。今後も各地域包括支援センターと連携し、本人とサポーターの双方がやりがいを感じられるよう支援していきたい。

埼玉県入間市

3つの班に分かれて話し合いながら取り組むチームオレンジ

■埼玉県入間市では、行政からの声かけによって、チームオレンジを設置した。チームの構成人数が多いことから、3つの班（①居場所づくり班、②研修・勉強会・個別支援班、③普及啓発班）に分けて、それぞれの班で活動内容を相談しながら取り組んでいる。

■本人もチーム員として参加し、「何かあったときに言える関係性をつくること」「支援する人と支援される人という垣根を越えて、仲間として協力し、支え合うこと」を大事にしながら、活動している。活動を通じて、チーム員が「本人目線で考える」ことができるようになっている。また、知識を学ぶだけでなく、そこから一歩踏み込んで「地域で本人・家族を支えていこう」という意識がチーム員の中で醸成されつつある。

■今後は、チームオレンジの活動を通して、本人の困りごとを把握し、活動の中で自然に本人支援をすることができ体制を整えていきたいと考えている。



チームオレンジいるまのチーム員



アルツハイマー月間における市庁舎展示の準備と実際の展示

基本情報

人口	14.6万人	高齢化率	30.0%
チーム数	1チーム	担当部署	福祉部 高齢者支援課
チームの構成	メンバー数は55名 本人、家族、地域住民、オレンジコーディネーター等で構成		
行政の推進体制	行政では、高齢者支援課担当者や認知症地域支援推進員を兼務しているオレンジコーディネーターが主体となり推進。また、以下と連携している。 ・地域包括支援センター ・生活支援コーディネーター ・地域のオレンジカフェや家族会 ・いるま市声かけ運動推進会		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

地域の認知症の方が安心して暮らしていけるように、「認知症になっても暮らしやすいまち」を目指す

活動内容

定例会を月1回開催し、以下の3つの班に分かれて活動内容を検討し、検討内容は全体で共有している。なお、実際の活動は、班を超えて、メンバー全員で取り組んでいる。そのほか、オレンジコーディネーターからの呼びかけに応じて、各地区の小中学校でのサポーター養成講座やオレンジカフェ、家族会、声かけ運動等に参加することもある。

- 居場所づくり班
イオンスタイル入間でのオレンジカフェを企画・運営
- 研修・勉強会・個別支援班
メンバーのスキルアップ、認知症サポーター養成講座の手伝い、オレンジカフェ等での寸劇の披露、個別支援の検討
- 普及啓発班
アルツハイマー月間の市庁舎展示や地域のラジオとのコラボ等を通して認知症やチームオレンジいるま等の普及啓発、ステップアップ研修におけるチームオレンジの紹介

チームオレンジの設置に至ったプロセス

行政の声掛けによってチームオレンジを設置
仲間同士の関係性づくりを重視した研修を開催

- ステップアップ研修の募集時に「チームオレンジの立ち上げ」を意識付け、修了者に行政から声をかけ、チームオレンジを設置した。月1回5か月間に及ぶチーム立ち上げ前研修では、「この仲間で活動していきたい」と思える関係性づくりを重視し、グループワーク等を多く取り入れた。

本人・家族の関わり状況

本人もチーム員として班に所属
「何かあったときに言える関係性」を重視

- 本人や家族もメンバーとして参加し、メンバー間で互いにフォローしながら活動している。活動にあたっては、「何かあったときに言える関係性をつくること」を大事にしている。主催するオレンジカフェをチームオレンジと本人・家族の出会いの場と考え、その中でいかに雑談できるか工夫している。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

チームと行政の距離感のバランスをとりながら、メンバーの主体的な活動による自走化を目指す

- チーム員の主体的な活動によるチームの自走化を目指すうえで、チームと行政の距離感が難しい。行政が主導しすぎるのではなく、メンバー間での議論や活動が活発になるよう、バランスを取りながら取り組んでいる。

行政の役割

チーム員全員が無理なく活動できるように情報を共有
各地区の地域包括支援センターとも連携

- 「できる時に、できる人が、無理なく」活動するため、メンバー全員に情報が行き渡るよう、議事録や活動報告等を行政から共有。
- 地域包括支援センター主催イベント等と連携し、各地区の活動を活性化するとともに、各地区の活動とチームオレンジの関係性づくりに努めている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 活動の具体化に伴い、メンバーの意識が著しく変化し、個々に「チームにできることは何か」を考えている。ステップアップ研修はメンバー増員を目的としているが、チームオレンジの紹介はメンバー自身が行う。メンバーの存在そのものが自治体にとっても頼もしい。
- 認知症の普及啓発を目的とした団体同士のつながりができている。

今後の展望・課題

- 活動が広がる中で、必要に応じてチームオレンジを紹介できるように地域包括支援センターと連携することや、財政的な支援の方法を検討していきたいと考えている。
- チームオレンジの活動を通して本人の困りごとを把握・支援していけるような体制を整えていきたいと考えている。

東京都清瀬市

空き家を活用したサロン活動を通じて、「支援する人、される人」を超えた共生の地域づくりを実践するチームオレンジ

■東京都清瀬市では、空き家を活用した交流拠点「中清戸オレンジハウス」（以下、「拠点」という。）でサロン活動や菜園ボランティアを実施している。拠点では、チーム員が、本人の得意なことや好きなことに耳を傾け、本人のやりたいことに取り組んでいる。

■活動のなかで、本人が得意分野の先生役として中心となり、チーム員や専門職の人たちと、「支援する人、される人」の垣根を超えて交流している。参加者同士の仲が深まり、拠点外でも交流を行うなど、チームオレンジの活動を起点として、「支援する人、される人」を超えた共生の地域づくりが実践されている。

■拠点への本人の参加や活動を通じた交流によって、チーム員の認知症に対する認識が変化しているほか、行政が本人と接点をもつ良い機会にもなっている。



活動拠点「中清戸オレンジハウス」の外観



中清戸オレンジハウスで実施した音楽イベントの様子

基本情報

人口	7.5万人	高齢化率	28.1%
チーム数	1チーム	担当部署	生涯健康部 介護保険課 地域包括ケア係
チームの構成	メンバー数は37名 本人、家族、地域住民、チームオレンジ・コーディネーター等で構成		
行政の推進体制	行政では、地域包括支援センターに所属するチームオレンジ・コーディネーター等が主体となり推進。また、以下と連携している。 ・認知症地域支援推進員 ・生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員） ・地域包括支援センター		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

支援する側・される側を超えた共生の地域づくり

活動内容

空き家を活用した拠点「中清戸オレンジハウス」では、チーム員が当番制で運営しながら、サロン活動（週1回）や団地の一角を活用した菜園ボランティア（月1回）を実施している。

サロンの主な内容は、以下のとおり。

- 本人の得意なことや好きなことを活かした楽器教室・英語教室の開催や植物の栽培
- クリスマス等のイベント開催
- 生活支援コーディネーターによる体操教室の体験会の開催

チームオレンジの設置に至ったプロセス

アンケートでやってみたいこと、得意なこと・好きなことを確認

- 令和2年度末にステップアップ講座受講者を対象にアンケートを行い、チームオレンジとしてやってみたいこと、得意なこと・好きなこと、地域で活用できそうな拠点情報を確認した。その後、チーム員と6回に渡るミーティングを重ね、実施できそうな活動について検討し、令和4年度より空き家を活用した交流拠点でのチームオレンジ活動を開始した。

本人・家族の関わり状況

チーム員以外の本人も自分の得意なことや好きなことを生かした活動を実施

- チーム員として運営側で参加している本人が1名いるほか、現在7名の本人がサロン活動に参加している。7名の参加者も、楽器教室や英語教室の開催にあたって、指導側として活躍する等、得意なことや好きなことを活かした活動を行っている。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

先行事例が少なく、活動方法を模索

- 空き家での活動実績がなく、予算編成等が難しかった。また、他自治体におけるチームオレンジの先行事例が少なかったことから、チーム員を集め、継続して活動していくための運営方法が分からず苦労した。

行政の役割

チーム員との定期的な意見交換、医師とも連携した活動周知

- 月1回のミーティングを行い、本人・家族を含めたチーム員全員と意見交換をしている。
- チラシ配布や市報への掲載、地域包括支援センターでの紹介だけではなく、医師と連携して本人にパンフレットを直接配布する等の周知を行っている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- チーム員の「認知症」に対する印象が好転した。また、参加者同士の仲が深まり、活動以外での交流にも繋がっている。
- 行政主導の本人ミーティングでは本人がなかなか集まらなかったが、「中清戸オレンジハウス」には10名前後の本人が定期的に参加している。

今後の展望・課題

- チーム拡大に向け、ステップアップ講座の開催数を増やしつつ、チームの魅力を周知していきたいと考えている。参加者の増加により活動場所が十分に確保できなくなる可能性がある点が課題となっている。

愛知県瀬戸市

本人の「やりたいこと」と サポーターの「できること」をマッチング オレンジサポーターと一体となって取り組むチームオレンジ

- 愛知県瀬戸市では、本人の「やりたいこと・やってみたいこと（趣味活動等）」とオレンジサポーターの「できること」をマッチングする“個別活動”や認知症の普及啓発活動を実施している。
- 本人や家族、現場を見ている地域支援推進員等と協議しながら、オレンジサポーターと一緒に考えて進めることを重視している。
- 各活動の前後には、事前打ち合わせと振り返りを必ず行い、活動に参加しているオレンジサポーターの意見を丁寧に確認し、活動内容を一緒に検討することで、活動の幅の広がりや新たな視点での活動の実施につながっている。



個別活動を行っている認知症のAさんと
オレンジサポーターさん



普及啓発活動「出張！せとらカフェ♪」の様子

基本情報

人口	12.9万人	高齢化率	29.9%
チーム数	1チーム	担当部署	高齢者福祉課地域支援係
チームの 構成	メンバー数は64名 本人、家族、オレンジサポーター、認知症地域支援推進員等で構成		
行政の 推進体制	行政では、高齢者福祉課が担当し、運営については認知症地域支援推進員が中心となり、以下と連携している。 ・地域包括支援センター ・認知症カフェ ・医療機関 ・社会福祉協議会 等		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・ コンセプト	本人とオレンジサポーターが活躍できるまちづくりの推進
活動内容	●「個別活動」 認知症の人の「やりたいこと・やってみたいこと（趣味活動等）」とオレンジサポーターの「できること」をマッチングしている。 ●「出張！せとらカフェ♪」プロジェクト 月に1回、各地域（公民館、スーパー、薬局等）で認知症講座やコグニサイズ、瀬戸の情熱（口腔ストレッチ）等、普及啓発活動を実施している。 ●「おいでんサロン」プロジェクト 月に2回、地域にある病院で様々な講座を開催。介護予防教室や人生会議等の専門職による講座のほか、オレンジサポーターが講師となり、川柳、ハンドマッサージ等の特技を活かした講座も実施。認知症に関する相談も受け付けている。 ●「オレンジガーデニング」プロジェクト 毎年9月の世界アルツハイマー月間に向け、認知症のイメージカラーであるオレンジ色の花を市内各所で栽培している。

チームオレンジの設置に 至ったプロセス	本人・家族の 関わりの状況	活動の定着に至るまでの 苦労や難しさ	行政の役割
「個別活動」から チームオレンジの活動を 開始し、順次活動を拡大 ●認知症サポーター養成講座修了者にチームオレンジの担い手となってもらうため、チームオレンジの内容を加えた認知症サポーター研修を実施。チームオレンジの参加を希望された方にオレンジサポーターとして登録してもらい、「個別活動」からチームオレンジの活動を開始。順次活動を拡大。	本人や家族も 認知症の普及啓発に尽力 ●本人は個別活動に参加し、オレンジサポーターと一緒に趣味や会話を楽しんだり、やりたいことを実現したりしている。また、「出張！せとらカフェ♪」や「おいでんサロン」での講座にも参加している。さらに、認知症の普及啓発活動の運営にも本人・家族が参加している。	「チームオレンジが 何のためにあるか」 を考えることが大事 ●当初は「チームオレンジを作らなければいけない」ということに気持ちが向いてしまい、どのような活動をすればよいか悩んでいた。しかし、チームを作ることの目的とせず、「チームオレンジが何のためにあるか」を考えることが大事だと気付いた時に、現在の活動の形が見えてきた。	フラットな関係での 協働を意識 ●オレンジサポーターと行政によるフラットな関係での協働を意識している。チャットツールを活用し、関係機関やオレンジサポーターへの情報共有を行っている。また、活動の目印となるパンダナの作成によりモチベーションの維持を図っている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの 取組の成果	●本人のみならずオレンジサポーターも活動を楽しんでいる。 ●オレンジサポーターの力で、市民参画による新しい視点の普及啓発活動を展開することができた。
今後の 展望・課題	●オレンジサポーターが中心となって活動できるような体制整備を進める必要がある。 ●医療機関との連携が不十分である。情報共有や受診された本人を紹介していただけるよう連携体制を構築していきたいと考えている。

島根県浜田市

転々とせず住み続けられる、マイペースに生活ができることを目指し、地域住民の思いを実現するチームオレンジ

- 島根県浜田市では、「介護が必要になっても、転々とした生活ではなく『なじみの人間関係』のなかで、『マイペースに生活ができる』地域をつくる」というビジョンを掲げ、地域の方の思いを実現する形でチームオレンジを2チーム（チームSOS・あすなろくらぶ）設置している。
- チームSOSでは、「認知症の方を何とか支えたい！」という思いを持つ民生委員等の地域の中でこれまで活動してきた方を中心とし、これまでの取組によって構築された「相談できる体制」を活かしたちょっとした困りごとの解消や、日頃のやりとりから把握した本人のやりたいことに一緒に取り組んでいる。
- あすなろくらぶでは、薬剤師や管理栄養士等の専門職が中心となり、かかりつけ薬剤師として築いた関係性を活かして把握した利用者の希望をふまえ、専門知識をもつメンバーとともに脳トレやフラワーアレンジメント、化粧体験といった教室を開催している。



基本情報

人口	5.2万人	高齢化率	37.6%
チーム数	2チーム	担当部署	健康福祉部 健康医療対策課 高齢者福祉係
チームの構成	メンバー数は61名 本人、家族、民生委員、薬剤師、管理栄養士等で構成		
行政の推進体制	行政では、健康医療対策課担当者等が主体となり、推進。また、以下と連携している。 ・認知症地域支援推進員 ・地域の医療機関 ・地域ケア会議		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト	介護が必要になっても、転々とした生活ではなく「なじみの人間関係」のなかで、「マイペースに生活ができる」地域をつくる（※地域ケア会議のビジョン）
活動内容	●チームSOS 認知症の本人や家族を支えるために、見守り・声掛け・話し相手・出前支援等のちょっとしたお困りごとに対する支援を行っている。具体的には、本人からの希望や困りごとに応じて、買い物の同行や「調理の仕方が分からない」といった不安感への傾聴、介護している家族の気分転換としてサロンへの同行等を実施している。メンバー数は44名。 ●あすなろくらぶ 本人が「笑顔」で健康に暮らせるよう、専門知識をもつメンバーと脳トレやフレイル予防、フラワーアレンジメント、化粧体験、自家製経口補水液の作成等の教室を開催している。メンバーが「一緒に食べようよ」と手作りの花びら餅を持参したり、知人を誘ったりする等、活動を通して、参加者同士の関わりが増え、より深い馴染みの関係の構築に繋がっている。メンバー数は17名。

チームオレンジの設置に至ったプロセス	本人・家族の関わり状況	活動の定着に至るまでの苦労や難しさ	行政の役割
転々とせず住み続けられる、マイペースに生活ができるそんな地域を目指して、地域の方を中心としたチームを設置	本人の希望や困りごとを聞き出し、その希望を叶えること、困りごとの解消に一緒に取り組む	チーム員の思いの実現に向け、チーム員と行政担当者がともに検討	チームの活動状況をふまえ、必要に応じて、行政担当者や関係機関を紹介
●地域ケア会議のビジョンに賛同した民生委員の方と一緒に地域のためにできることを検討する中で、本人が転々とせず住み続けられるように支え合える体制を構築するため、チームオレンジを設置した。	●チームSOS 民生委員の活動により把握した本人の困りごとに対して、支援内容を検討・実施している。 ●あすなろくらぶ かかりつけ薬局の薬剤師と利用者という関係性からはじまり、日頃の困りごとの解決や本人のやりたいことに一緒に取り組んでいる。	●チーム員の「本人を何とか支えたい」という気持ちをどのようにチームの取組としていくか、行政としての支援のあり方を検討するところから始まった。今でも定期的な話し合いの場（月1回程度）を設け、活動の主旨や目的を確認しながら、活動を続けている。	●各チームが主体的に活動し、メンバー同士の話し合いにより運営されている。 ●行政は、チームとの定期的な連絡会や認知症疾患医療センター等の紹介をするほか、要望に応じて、活動の場所の確保やその費用、講師謝礼、教材費等に対する補助を実施している。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果	●地域住民同士が支え合えるような体制ができ、元気高齢者の活動の場にもなっている。 ●本人以外のチーム員に対して、チームとしてフラワーアレンジメントを作成して応援する等、本人を含むチーム員が互いに支え合う関係性が構築され、住みやすい街づくりに向けた取組となっている。
今後の展望・課題	●新しいチームの設置に関しても地域から声が上がりはじめている。行政からのトップダウンな取り組みにならないよう、地域からの声によって出来上がったものをフォローしていくよう積極的に支援していきたいと考えている。

北海道北広島市

本人・サポーター・地域住民が「支援する・される」の関係性を超え、仲間同士で繋がり合いながら気軽に参加できるチームオレンジ

■北海道北広島市では、本人・サポーター・地域住民によって構成された4つのチームを設置。平成19年度から傾聴ボランティアが本人の自宅に訪問して話し相手となる①認知症支え合い事業を開始。令和3年度からは、「きたひろしまおれんじメイト」が中心となり、身近な所から認知症を知ってもらう活動として、②認知症サポーターカード制作隊や③オレンジフラワーサポーター、④図書PR隊などを開始。チームオレンジの活動は地域住民にも徐々に浸透し、活動の輪は年々広がってきている。

■②認知症サポーターカード制作隊では、本人やサポーター、地域住民等の仲間同士が「支援する・される」の関係性を超え、気軽に参加できることを大切にしている。参加者は、作業する内容も当日の気分に応じて自分で決めることができ、好きな作業に楽しみながら取り組んでいる。参加の気軽さから、「認知症のことを学ぶ場」「認知症のことを相談できる場」としての役割も果たしており、地域住民からも、「認知症は他人事ではない」と普及啓発活動への理解の声があがっている。



オレンジの花で認知症啓発



カード制作の様子



図書館でPOP展示

基本情報

人口	5.8万人	高齢化率	33.3%
チーム数	4チーム	担当部署	保健福祉部 福祉総合相談室
チームの構成	メンバー数は107名 本人、認知症支え合い員、地域住民等で構成		
行政の推進体制	行政では、保健福祉部担当者、チームオレンジ・コーディネーター、認知症地域支援推進員が主体となり、推進。また、以下と連携している。 ・生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員） ・地域包括支援センター ・地域の認知症カフェ・地域の介護事業所・施設・地域の社会福祉協議会・図書館		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

「認知症になっても安心して暮らせるまちづくり」
～好きなことをいつまでも続けられるまちを目指して～

活動内容

- 認知症支え合い事業
本人の自宅に傾聴ボランティア（認知症支え合い員）2名が訪問し、話し相手や見守りを行う活動
- 認知症サポーターカード制作隊
認知症サポーター養成講座受講者に配布するカードを作成する活動
- オレンジフラワーサポーター
オレンジ色の花（マリーゴールド）を自宅や町内会などで育てて普及啓発を行う活動
- 図書PR隊
毎年9月の世界アルツハイマー月間に向けて、図書館の認知症関連書籍を手作りのPOPで紹介し、身近なところから認知症を知ってもらうための普及啓発の活動

チームオレンジの設置に至ったプロセス

既存の取組に加えて、より参加しやすい活動として3つの活動を開始

- 平成19年度に①認知症支え合い事業を開始。平成29年度からステップアップ講座を開始したが、受講者の活動先がなかった。サポーターの「認知症のことをもっと地域の方に知ってほしい」という声を受け、参加しやすい活動として令和3年度に②カード制作隊③オレンジフラワーサポーター④図書PR隊を立ち上げた。

本人・家族の関わり状況

家族との情報共有や本人も参加しやすいような工夫をした取組

- ①の活動では、本人の傾聴や見守りを行い、必要に応じて家族や関係機関と情報共有している。
- ②③④の活動では、本人がやりたいと思うことを尊重し、「得意なことでも力を貸してほしい」などの声掛けをするほか、活動先に集まることが難しい場合、自宅でもできる作業を提案するなど工夫している。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

気軽に活動できる体制を整備

- やりたいことを選べるように複数チームを立ち上げ、各々が得意分野で力を発揮している。②の活動では、買い物ついでに立ち寄り、用事があって早退するなど、自由に入り出ることができる。また、認知症の普及啓発に協力したい、役に立ちたいと思う地域住民などを幅広く受け入れた。

行政の役割

地域支え合いセンターが各活動の企画・運営を担う

- 地域支え合いセンター（社会福祉協議会内）へ認知症施策の普及啓発事業を委託。
- ①の活動では、本人と支え合い員のマッチングや名簿管理、関係機関との情報交換等を実施。②③④の活動も、企画・運営を担い、メンバーと相談しながら取り組んでいる。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- チームオレンジの活動が地域住民にも徐々に浸透し、活動の輪が年々広がってきている。取組を評価する住民の声も聞かれ、認知症に関する正しい知識・理解の普及に繋がっている。

今後の展望・課題

- 本人や家族の参加がまだ少ないため、「本人の声」を起点とした活動の広がりにはまだ至っていない。地域支え合いセンターだけでは、本人の参加に結びつけることが難しいため、他機関との連携が必要と感じている。

岩手県矢巾町

既存のボランティア団体を結び付け、 多方面から本人・家族を支えるチームオレンジ

- 岩手県矢巾町では、チームオレンジ設置前から、認知症サポーターが立ち上げた生活支援、地域の見守り活動等を行う複数のボランティア団体が存在していたことから、それぞれの特徴を活かし、各取組の連携を推進するため、既存の団体を再構築する形でチームオレンジを設置した。
- 自宅訪問による出前支援やサロン・カフェ等の居場所（本人向け・家族向け）の運営、愛犬家による見守り活動を実施している。
- チームオレンジの広がりが、「認知症になっても大丈夫」という地域全体の意識の醸成につながっている。また、チームオレンジの活動を通して、他部署や地域の企業との繋がりが強化され、地域づくりや認知症施策の広がりにも貢献している。



令和3年5月11日
結成式

本人・家族、医療福祉関係者、行政、ボランティア、地域の店舗など
総勢73名

チームオレンジ矢巾



矢巾わんわんパトロール隊

基本情報

人口	2.7万人	高齢化率	27.3%
チーム数	1チーム	担当部署	担当部署 健康長寿課
チームの構成	メンバー数は73名 本人、家族、キャラバン・メイト連絡会、おれんじボランティア、わんわんパトロール隊、高齢者にやさしいお店等で構成		
行政の推進体制	行政では、健康長寿課担当者と地域包括支援センターに所属するチームオレンジ・コーディネーター（認知症地域支援推進員を兼務）等が主体となり推進。また、以下と連携している。 ・矢巾町社会福祉協議会 ・矢巾町内の居宅介護支援事業所 ・矢巾町生活支援コーディネーター ・矢巾町商工会 ・矢巾町民生児童委員		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

地域の本人または家族をチームとして支えること

活動内容

「居場所をつくる 仲間をつくる 役割をつくる」をキーワードに、以下の活動を実施している。

- 自宅訪問による生活支援
サロンや認知症カフェ等の居場所に行くことにはまだ抵抗がある本人の話し相手となり、居場所への参加を勧めたり、「お墓参りに行きたい」等の希望に応えたりしている。
- サロンや認知症カフェ等の居場所（本人向け・家族向け）の運営
本人のための居場所と家族が介護者同士や専門職と話せる場を運営している。本人のための居場所は、プログラムを決めておらず、誰でも好きな時間に入出りできる場としている。
- 愛犬家による見守り活動（わんわんパトロール隊）
愛犬との散歩時間を利用して、住民間のコミュニケーションを活性化し、高齢者の見守り等を行っている。地域の身近な相談者となっている。
- まだまだ働きたい！
本人たちの声から生まれた活動で拠点に集まって軽作業をしている。

チームオレンジの設置に至ったプロセス

複数のボランティア団体を起点として設置

- 認知症サポーター養成講座修了者によって複数のボランティア団体が立ち上がっていた。それらの団体を繋ぎ、再構築することで「チームオレンジ矢巾」を設置。各団体の活動内容や組織は変わらず、それぞれの特徴や役割を活かしながら連携している。

本人・家族の関わり状況

本人・家族からも活動への意見を収集

- 各団体の代表によるリーダーミーティングを定期的に開催し、チーム員である認知症の本人と家族が参加している。また、チームオレンジ活動を通して参加者からの意見を聞き取り、取組に反映するようにしている。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

活動の周知や居場所参加への抵抗感が課題

- 地域包括支援センター等への相談には至らないちょっとした困りごとを抱えている方に、チームオレンジの活動を知ってもらうことが課題。また、居場所への参加に抵抗感がある方もいるので、最初の一步を後押しする必要がある。

行政の役割

地域住民とともに活動に取り組む

- 担当者と地域包括支援センターが連携することで、地域住民とともに活動に取り組んでいる。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 認知症に対するイメージや意識が変わってきている。地域住民からは、チームオレンジの存在が「認知症になっても頼れる場所」として認識され、安心感につながっている。
- 本人のやりたいことを叶えるために、他部署や地域企業との連携が生まれ、地域づくりや認知症施策の広がりにも貢献している。

今後の展望・課題

- 仕事をしたいという本人の希望を叶えられるようにしたいと考えている。特にサロンへの来訪が少ない男性に仕事を提供し、社会参加に繋がりたいと考えている。

栃木県佐野市

様々な人と人がつながり、地域のことをより深く知り、 ともに考え本人・家族の生活をアシストするチームオレンジ

■栃木県佐野市では、まちなかサロン「楽風カフェ」「大人の学舎」を拠点としたチームオレンジ活動を実施している。「楽風カフェ」「大人の学舎」では、認知症に関する事項も含めて、日常生活に必要な情報や知識などを気軽に学べる機会等を提供している。

■活動に共通する理念として、なじみある街中の居場所や人的資源を活かし、本人・家族の地域での生活の実現、継続をアシストすることを大切にしている。また、アシストという機会を通じて、本人・家族を含めて、様々な人と人がつながることで、より良い地域社会を構築することにつなげている。

■チーム内の職域サポーターと協力サポーターが連携して主体的に活動を推進し、行政はその後方支援の役割を果たしている。活動を通じて、行政や地域住民が地域のことをより深く知り、ともに考える機会が増えたことにより、虐待の早期発見や、地域での脳活習慣の啓発など、認知症以外の領域でも様々な相乗効果が生じている。



啓発活動 さの市民マラソン参加のチーム員



「チームオレンジさの」チーム全体イメージ

基本情報

人口	11.6万人	高齢化率	31.1%
チーム数	1チーム	担当部署	健康医療部いきいき高齢課
チームの構成	メンバー数は69名 地域の企業・団体、専門職等の職域サポーターと地域住民等の協力サポーター等で構成		
行政の推進体制	行政では、地域包括支援センター、認知症地域推進員、チームオレンジコーディネーター等が主体となり推進。また、以下と連携している。 ・地域の認知症カフェ ・地域の医療機関 ・地域の介護事業所・施設		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

なじみある街中の居場所や人的資源を活かし、本人・家族の地域での生活の実現、継続をアシストすること。また、アシストという機会を通じて、本人・家族を含めて、様々な人と人がつながることで、より良い地域社会を構築すること。

活動内容

本人・家族を含めて、地域住民同士が交流できるまちなかサロン「楽風カフェ」「大人の学舎」を拠点として、以下の活動を実施している。また、孤立による認知機能の悪化を先送りして、住み慣れた地域においてできる限り継続して暮らせる機会を提供している。

- 参加者の介護相談への対応（相談支援）
- 介護者に役立つ講座の開催
- 必要に応じて、認知症の人の家への戸別訪問による本人・家族サポート
- 地域のイベントに企画参加など啓発活動

チームオレンジの設置に至ったプロセス

なじみある街中の居場所や人的資源を活かす

- 認知症カフェ等の既存の認知症関連事業を実施している中で、国の示す「チームオレンジ」の取組を知り、設置に着手した。設置にあたっては、なじみある街中の居場所や人的資源を活かすことを大切にしたい。

本人・家族の関わり状況

本人・家族も仲間の1人として参加

- 「楽風カフェ」「大人の学舎」では、認知機能が低下しても、仲間として迎え入れ、付き合ってくれる仲間（チーム）がいるという安心感を提供することを大切にしている。認知機能の低下があることを過度に特別視せず、本人・家族も仲間の1人としての様々な活動に参加している。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

既存の地域の活動と連携することで、地域のニーズや変化に早期に対応

- チーム員であるサポーターに「今までの活動を続けること」、「地域で気になることがあれば共有すること」をお願いしている。それにより、既存の地域の活動と効果的に連携しながら、地域のニーズや変化に早期に対応でき、結果としてスムーズな活動の定着に至った。

行政の役割

住民主体で推進、行政は後方支援を担う

- チーム内の職域サポーターと協力サポーターが連携して主体的に活動を推進し、行政は健康医療部いきいき高齢課の担当者が中心になり、その後方支援の役割を果たしている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 「楽風カフェ」「大人の学舎」が認知症の有無に関わらず、だれもが集まりやすい場所となり、結果として、本人や家族の困りごとを把握する機会が増えている。
- 活動を通じて、行政や地域住民が地域のことをより深く知り、ともに考える機会が増えたことにより、虐待の早期発見等、認知症以外の領域でも様々な相乗効果が生じている。

今後の展望・課題

- チームを中心に職域・協力サポーターが数珠つなぎにつながってきており、今後も現在の活動を継続し、本人・家族を含めて、様々な人と人がつながる機会を作り、「誰にとっても」より良い地域社会の構築を進めていく。

千葉県千葉市

認知症カフェを起点として、本人の希望を実現する活動や本人・家族のための交流を実施するチームオレンジ

- 千葉県千葉市では、認知症カフェを母体とした3つのチームオレンジが活動している。ステップアップ講座修了者のいる認知症カフェは複数あるが、本人・家族が希望や困りごとを発信でき、それぞれの希望の実現や困りごとの解決に取り組んでいる活動をチームオレンジと定義している。
- 活動にあたっては、地域の実情に合わせたチームの設置や交流が進むよう、認知症地域支援推進員が中心となって、市の担当者とチームオレンジコーディネーターが連携しながら、地域住民への周知等に取り組んでいる。
- チームオレンジの活動を通して、本人・家族が地域の理解者と出会うことで、前向きな思いを持てるようになり、社会参加のきっかけとなっている。



「Green カフェ」では、「植物を育てたい」という本人の希望を実現



「ほっとくるカフェ」の活動の様子

基本情報

人口	97.6万人	高齢化率	26.2%
チーム数	3チーム	担当部署	保健福祉局健康福祉部 地域包括ケア推進課 認知症対策班
チームの構成	メンバー数は3チームで約30名 本人、地域のボランティア団体、認知症カフェのメンバー等で構成		
行政の推進体制	行政では、チームオレンジコーディネーター、地域包括支援センターに所属する認知症地域支援推進員等が主体となり、推進。また、以下と連携している。 ・生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）・地域包括支援センター ・地域の認知症カフェ ・地域の民間企業 ・地域のボランティア団体		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト	「本人やその家族の支援ニーズ」と「認知症サポーターを中心とした支援」を繋ぐ
活動内容	3つのチーム（「Green カフェ」、「気楽に桜木」、「ほっとくるカフェ」）が活動を行っている。 ●「Green カフェ」 本人から「花を育てたい」「趣味の写真を見てほしい」といったやりたいことを聞き、認知症カフェの時間を利用して、やりたいことの実現に向けた活動を行っている。 ●「気楽に桜木」 「誰もが気楽に立ち寄れるカフェ」、「参加者のやりたいことができるようなカフェ」をコンセプトに傾聴や見守りを行っている。本人・家族にとって新たな出会い・繋がりが生まれている。 ●「ほっとくるカフェ」 ドラッグストアが提供する交流スペースを拠点とした語り合いの場である。毎回の活動は、自己紹介と近況報告から始まり、当日の参加者の意見を聞きながら、テーマや席の配置を決めている。

チームオレンジの設置に至ったプロセス	本人・家族の関わり状況	活動の定着に至るまでの苦労や難しさ	行政の役割
本人や家族が希望や困りごとを言える、その実現・解決に向けて取り組める認知症カフェを母体として設置 ●既存の認知症カフェのうち、「本人や家族が希望や困りごとを言うことができること」と「本人や家族の希望の実現や困りごとの解決を考えていこうとしていること」という基準を満たす認知症カフェがチームオレンジとなっている。チームオレンジを見据えて立ち上げた認知症カフェもある。	必要時、適度なサポートのもと、他の参加者と変わりにくく過ごす ●本人は各認知症カフェに参加し、他の参加者と交流し、認知症カフェの主催者が必要時、適度な声掛けやサポートを行っている。 ●本人が希望や困りごとを話しやすい環境をつくるため、参加している本人の希望を聞き、本人だけを特別視せず、参加者全員が近況報告をしあう形式にする等、工夫して活動している。	チームオレンジの活動をイメージできるようステップアップ講座の内容を工夫 ●チームオレンジの概念や理念、活動内容について、住民からの理解を得られるように説明することが難しい。 ●ステップアップ講座において、実際のチームオレンジの活動をイメージできるようワークとロールプレイを実施するとともに、「認知症サポーターステップアップ講座活動事例集」を作成・配布している。	認知症地域支援推進員が中心となって推進 ●地域の実情に合わせたチームの設置や活動ができるよう、第2層生活支援コーディネーターを兼務している認知症地域支援推進員が中心となって、地域住民への周知等に取り組んでいる。 ●必要に応じて、市の担当者やチームオレンジコーディネーターが地域の団体へチームオレンジの説明に出向くこともある。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果	●ステップアップ講座において、意欲のあるボランティアと認知症地域支援推進員が繋がり、行政主体ではなく住民主体での活動を行うことができた。本人・家族が地域の理解者と出会うことで、前向きな思いを持ち、社会参加のきっかけとなっている。
今後の展望・課題	●本人・家族にとって居心地の良い環境、本人が自分らしくいられる場であることを大切に、多くの理解者との出会いや社会参加につながっていくことで、より良い暮らしが続けられるようにしていきたいと考えている。

神奈川県平塚市

認知症も含めた地域の困りごとを解決するチームオレンジ

■神奈川県平塚市では、元々、日常生活圏域ごとに福祉村やカフェ、通いの場を設置していた。それらの既存の社会資源を母体とし、地域包括支援センターごとにチームオレンジを設置した。これまで地域の中で福祉村ボランティアや民生委員等として活動してきた方々が中心となり、各チームが活動している。

■チームごとに活動内容は異なるが、主に、福祉村での軽作業等の活動や戸別訪問等の民生委員としての活動、普及啓発イベントのサポート等の地域包括支援センターと連携した活動、認知症カフェ・通いの場の運営などを行っている。

■チームオレンジの活動を通して、住民たちが何か困りごとが生じた際や困りごとを抱えている人に気付いた際に地域包括支援センターへ連絡が入るようになった。そのため、素早い情報収集が可能となり、同センターと地域の団体が連携してスムーズに本人への支援をできるようになっている。



湘南ひらつか織り姫と街頭キャンペーン



屋外教室で一緒に認知症予防の体操



VR認知症体験会とチームオレンジの交流

基本情報

人口	25.6万人	高齢化率	28.6%
チーム数	13チーム	担当部署	福祉部 高齢福祉課
チームの構成	メンバー数は217名 地域の中で福祉村ボランティアや民生委員、自主的な活動団体等として活動してきた方等で構成		
行政の推進体制	高齢福祉課担当者、地域包括支援センターに所属するチームオレンジ・コーディネーター（認知症地域支援推進員と兼任）等が主体となり、推進。また、以下と連携している。 ・町内福祉村、生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）・民生委員 ・地区社会福祉協議会 ・地域包括支援センター ・地域の認知症カフェ		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

これまで地域で活動してきた方・支援してきた方と本人をマッチングし、本人が地域で住みやすい環境をつくる

活動内容

チームによって活動内容は異なるが、主に以下の活動に取り組んでいる。

- 福祉村のボランティア
地域サロンの運営、軽作業、ゴミ出しや片付け
- 民生委員
高齢者の見守り、戸別訪問、地域からの情報収集や対応
- 地域包括支援センターとの連携
生活課題の解決の手伝い、普及啓発イベントのボランティア、認知症予防教室（受付、コグニサイズ実演補助、血圧測定補助、当日声掛け）、認知症カフェ（受付、話し相手、歩いて送迎、当日声掛け）、認知症サポーター養成講座（小学校実施時の寸劇、マスコットの共同製作）
- 地域の通いの場
日程のお知らせ、前日の電話、当日に自宅へ寄り声掛けや電話

チームオレンジの設置に至ったプロセス

既存の社会資源を活かして、地域包括支援センターごとにチームを設置

- これまで地域の中で福祉村ボランティアや民生委員等として活動してきた方々に対して上級研修（ステップアップ講座）を実施していた。日常生活圏域ごとに福祉村やカフェ通いの場が設置されていたため、既存の社会資源を母体として地域包括支援センターごとにチームを設置した。

本人・家族の関わり状況

活動の中で、チーム員が本人の困りごとを解決

- 本人は福祉村やサロン等の参加者として参加しているが、チーム員として参加するには至っていない。参加している中で困りごとを把握した場合、チーム員が支援することもある。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

ボランティアが感じる“チームオレンジとしての活動”への違和感

- 元々、チームオレンジ施策開始前から、ボランティアが活躍していた。活動しているボランティアの方々に、「あなたたちは、チームオレンジのメンバーだ」と言っても、ボランティア自身の気持ちの切り替えがうまく出来ない。確かにチームオレンジを設置しているが、実際に活動している人が自身をチームオレンジと認識していないといった温度差がある。

行政の役割

認知症地域支援推進員が各チームのリーダーとして活躍

- チームオレンジ・コーディネーター及び各チームのリーダーを認知症地域支援推進員が担い、市との情報共有を行っている。本人・家族から相談を受けた時点で、必要な支援につなぎ、つないだ先で活動しているチーム員と連携して本人の支援をしている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- チームオレンジの活動を通して、何か困りごとが生じた際・困りごとを抱えている人に気付いた際に、地域包括支援センターへ連絡してくれるようになり、情報が早く集まるようになった。
- チームオレンジ・コーディネーターと地域の福祉村やサロンの運営者の方たちと連携ができてくると、情報共有ができスムーズに本人の支援ができるようになる。

今後の展望・課題

- 地域ごとに社会資源にバラツキがあるため、どの地区でも受け皿があるといった状態にしたいと考えている。
- 今後は、若い年代層にも支援の輪が広がっていくように、地域の大学などに認知症の普及啓発を行い、ボランティアを育てていきたい。

石川県小松市

「とことん当事者」を合言葉に養成された マイスターが本人・家族とともに 地域で活躍することを目指すチームオレンジ

■石川県小松市では、認知症になっても自分らしく役割をもって生きていけるまちを目指し、地域で主体的に活動する人材を育成するため「小松市認知症ケアコミュニティマイスター養成講座」を開催している。

■小松市認知症ケアコミュニティマイスター養成講座では、「とことん当事者」をコンセプトに、認知症当事者と語る会や排泄・栄養等の高齢者へのケアの理解、実際に地域で活動するためのアクションプランの作成等、計9日間・45時間の講義・演習を行っている。

■マイスター（講座修了者）は地域で自ら認知症の人と関わりながら活動するだけでなく、マイスターにより構成される「小松市認知症ケアコミュニティマイスターの会」において、マイスター同士が連携し、普及啓発活動や認知症カフェの企画・運営を行っている。



様々な立場の人が講座を受講



養成講座の教材

基本情報

人口	10.6万人	高齢化率	28.7%
チーム数	1チーム	担当部署	健康福祉部 長寿介護課
チームの構成	メンバー数は75名 小松市認知症ケアコミュニティマイスター養成講座の修了者で構成		
行政の推進体制	行政では、長寿介護課担当者等が主体となり、推進。また、以下と連携している。 ・地域包括支援センター ・地域のボランティア団体		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

『とことん当事者』を合言葉に、
認知症になっても自分らしく役割をもって生きていけるまちづくり

活動内容

小松市認知症ケアコミュニティマイスター養成講座（以下、「養成講座」という。）の修了者（以下、「マイスター」という。）は、個人で行う地域での活動のほか、小松市認知症ケアコミュニティマイスターの会（以下、「マイスターの会」という。）に所属し、以下のような活動を実施している。

- 認知症に関するイベント
本人による講演会や市民講座、身近な方の思いや印象を“聞き”話し言葉で“書く”講座、ケアを題材にした映画の上映会を開催した。
- 認知症カフェ
養成講座の開催日に合わせて、別室で認知症カフェを開催した。
- 認知症に関する資料・グッズ
マイスターの会に関するパンフレット等を作成した。

チームオレンジの設置に至ったプロセス

9日間45時間の講座を修了したマイスターたちによる地域のための活動をチームオレンジと位置付け

- 元々専門職・市民を対象とし、認知症の理解だけでなく、地域づくりの具体的なアクションを学ぶ計9日間45時間の養成講座を開催していた。本人のために多様なアクションを主体的に実施しているマイスターの会をチームオレンジと位置付けた。

本人・家族の関わり状況

マイスターが個々に行う活動の中で、相談できる関係性を築いている

- マイスターが地域の中で活動していくにあたって、日頃から身近な本人と接しており、それぞれと相談できる関係性を築いている。また、マイスターの会が主催する認知症カフェへの本人・家族の参加を目指している。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

感染症対策のため対面でのコミュニケーションが減少

- 新型コロナウイルスの拡大によって、気軽に対面で集まれなくなってしまったため、活発なコミュニケーションが難しくなったと感じている。一度距離ができてしまったメンバー同士のつながりを、つなぎ直していきたい。

行政の役割

生活支援コーディネーター等の行政職員も受講し、専門職・市民マイスターと連携

- 生活支援コーディネーターや認知症地域支援推進員も養成講座を受講し、マイスターと連携して地域づくりに取り組んでいる。
- マイスターの会の活動方針等をマイスターとともに検討し、地域包括支援センター・ボランティア団体との連携や予算確保等を行っている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 養成講座での課題と一緒に取り組むことを通して、専門職同士のつながりや、専門職と市民とのつながりが生まれ、地域の中での個々人の活動だけではなく、マイスターの会としての活動にもつながっている。

今後の展望・課題

- 本人のニーズを把握し、本人のやりたいことを応援していきたいと考えている。そのためには、本人や家族とどのように出会うか、ともに活動をしていくためにはどのような仕掛けが必要かを検討する必要がある。

長野県駒ヶ根市

共生の「地域づくり」と認知症になっても “仲間”としてともに活動できる「場づくり」を実践する 住民主体のチームオレンジ

- 長野県駒ヶ根市は、「認知症になっても希望を持ち、生きがいのある暮らしを続けることができる地域づくり」と、自分・家族が、認知症になっても“仲間”としてともに活動できる「場づくり」をチームオレンジの活動を通じて実践している。市内に複数のチームオレンジが存在し、形態や活動内容はそれぞれ異なるが、共通した理念をもっている。
- 行政が実施する「おれんじネット事業」の運営の一部を、NPO法人地域支え合いネットに委託し、地域住民でもあるNPOのメンバーやボランティア団体、行政等が相互に連携し、住民主体で多様な活動を行っている。活動が地域住民の意識の変化にもつながっており、「いつかは自分もなるから勉強しなきゃいけない」といった声が出ている。
- 認知症関連事業と生活支援整備体制事業を一体的に実施し、制度のはざまにあるニーズもしっかりと拾い上げ、活動内容に反映している。

基本情報

人口	3.2万人	高齢化率	31.5%
チーム数	5チーム	担当部署	地域保健課
チームの構成	メンバー数は136名 認知症サポーター、NPO法人のメンバー、ボランティア団体、生活支援コーディネーター、地区社協担当者、行政関係者、認知症本人、介護家族、一般住民等で構成		
行政の推進体制	行政では、地域包括支援センターに所属する認知症地域支援推進員（3名）、チームオレンジ・コーディネーター（2名）が主体となり推進。また、以下と連携している。 ・生活支援コーディネーター（市の臨時職員） ・地域の認知症カフェ ・地域の社会福祉協議会 ・地域のボランティア団体 ・認知症初期集中支援チーム ・協議体（生活支援体制整備事業）		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト	「認知症になっても希望を持ち、生きがいのある暮らしを続けることができる地域」づくり 自分・家族が、認知症になっても“仲間”としてともに活動できる場づくり
活動内容	以下の5つのチームにおいて、それぞれ活動を実施している。 ●おれんじネットフレンズ 本人を含めた認知症サポーターや、認知症の人と家族の会会員を中心として、認知症カフェや個別支援等の活動を実施。 ●亀群（かめむら） 宅幼老所を拠点として、暮らしの延長線上にあるような居場所を目指して、介護予防や生活支援、認知症カフェ、農産物加工等の活動を実施。 ●町4区ほのぼのやまびこ フラワーアレンジメントグループの有志等が声を掛け合い立上げ、やまびこ荘を拠点に介護予防教室等の活動を実施。 ●ひなたぼっこ 通いの場の運営に関わっている認知症サポーターが中心となり、認知症カフェ等の活動を実施。子育て・生活・介護等のなんでも相談窓口となっている。 ●マヤの会 本人の社会参加の場としてスタート。本人や認知症サポーター等によるネパール母子保健支援プロジェクトを通しての出産祝い手作り品の作製のボランティア活動等を実施。

チームオレンジの設置に至ったプロセス	本人・家族の関わり状況	活動の定着に至るまでの苦労や難しさ	行政の役割
通いの場やサロンに認知症の人が一緒にいることが普通に ●認知症を正しく理解し、地域で支え合う活動を促進する取組（おれんじネット事業）と住民主体の介護予防・支え合いの体制を整える取組（生活支援体制整備事業）を推進した結果、通いの場やサロンに認知症の人が一緒にいることが普通になってきた。そのような変化を踏まえ、令和3年度から両事業を連携させ、チームオレンジの設置に着手した。	認知症になっても“仲間”としてともに活動できる「場づくり」 ●本人・家族が“仲間”としてともに活動できる「場づくり」を大切にし、気軽に話しやすい雰囲気づくりを心掛けている。本人・家族が、どのような活動をしたかといったニーズを何気ない会話を通じて把握し、活動内容に反映している。	既存事業を活用することで、スムーズな立上げ、定着を実現 ●おれんじネット事業や生活支援体制整備事業といった既存事業の延長線上にチームオレンジを位置付けたことにより、スムーズな立上げ、定着を実現した。	住民主体で推進、行政は後方支援を担う ●行政が実施するおれんじネット事業の運営の一部を、NPO法人地域支え合いネットに委託し、地域包括支援センターと協働して推進。地域住民でもあるNPOのメンバーと地域のボランティア団体、認知症カフェ、サポーター等が住民主体で多様な活動を行い、行政は後方支援を担っている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果	●チーム員から「活動への参加前後で認知症への認識が大きく変わった」、「いつかは自分もなるから勉強しなきゃいけない」といった声が出ている。自分・家族が、認知症になっても“仲間”として地域での生活をしていけるという安心感が地域に少しずつ根付いている。
今後の展望・課題	●市内の16行政区全てにおいてチームオレンジの構築を目指している。 ●チームオレンジに登録した団体へのメリットやチーム員のスキルアップについての検討が必要。

静岡県静岡市

“チームの立ち上げ”に重点をおいた 自治体からのサポートとそれに応えた地域住民による 認知症にやさしいまちづくりに向けたチームオレンジ

■静岡県静岡市では、自治会や民生委員・児童委員協議会、地区社会福祉協議会やボランティア等、住民主体の地区組織を活かして4つのチームを設置。行政は“チームの立ち上げ”に注力し、各チームの具体的な運営は地域住民であるチーム員に任せている。

■各チームは地域に合った創意工夫をしながら本人・家族のニーズをふまえた活動を実践。ゼロから立ち上げたチームでは、認知症に優しい地域づくりに関する検討会を継続的に開催するほか、認知症サポーター養成講座を、対象を変えながら地域の中で複数回開催した。その他、既存の取り組みを母体としたチームでは、元々実施していた取り組みを着実に実施することでチーム活動としている。

■チームオレンジが目指すものやその必要性を理解してもらうため、「誰もが認知症になる社会で、いつ自分が認知症になるかもわからない。地域で暮らし続けることを目指すなら、ぜひ一緒にやりましょう」と声をかけ続け、賛同してくれるチーム員を地域で増やしている。

基本情報

人口	68.9万人	高齢化率	30.7%
チーム数	4チーム	担当部署	保健福祉長寿局 地域包括ケア・誰もが活躍推進本部 在宅医療・介護連携推進係
チームの構成	メンバー数は151名 自治会、民生委員・児童委員、地区社会福祉協議会、住民ボランティア等で構成		
行政の推進体制	行政では、地域包括ケア推進本部担当者が主体となり、推進。また、各チーム活動では、以下とも連携。 ・認知症地域支援推進員 ・生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員） ・地域の認知症カフェ ・地域の民間企業 ・地域の医療機関 ・地域の介護保険事業所 ・地区社会福祉協議会 ・地域のボランティア団体 ・自治会連合会 ・民生委員・児童委員協議会		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト	住民サポーターが、本人や家族と共につくりあげる「認知症に優しい地域」の実現
活動内容	以下の4つのチームにおいて、それぞれ活動を実施している。 ●チームオレンジ駒形 認知症に優しい地域づくりに関する検討会を継続的に開催。自治会長、地区社会福祉協議会役員、民生委員・児童委員を対象とした認知症サポーター養成講座を実施。 ●チームオレンジみ・て・こ 認知症の有無に関わらず、地域に暮らす高齢者を対象に見守り・手伝い・声掛けを実施。 ●チームオレンジ大谷久能 認知症の有無に関わらず利用できる通いの場の運営のほか、見守り活動を実施。 ●チームオレンジ長田西 認知症の有無に関わらず、地域に暮らす高齢者を対象に見守り・手伝い・声掛け等を実施。

チームオレンジの設置に至ったプロセス	本人・家族の関わり状況	活動の定着に至るまでの苦労や難しさ	行政の役割
地域特性に合わせてゼロスタートのチームと既存の取り組みを母体としたチームを設置	本人・家族のニーズをふまえた活動の検討と、本人・家族を対象とした取組の実施	チームオレンジが目指す「認知症に優しい地域づくり」を“我がごと”として捉えてもらうための働きかけ	チームの立ち上げに重点を置いた支援を実施
●あるチームは、地域包括支援センターが住民や事業者へ声を掛け、活動内容等を検討し、自治会長をリーダーとして立ち上げた。そのほか、住民主体のデイサービスに本人が参加することがあったことから、本人への支援やスタッフの認知症への理解をさらに促進させるため、既存の取組を母体として立ち上げたチームもある。	●あるチームでは、メンバーが認知症カフェで本人・家族からニーズを聞き取り、活動内容を検討した。そのほか、本人を対象とした見守りや声掛け等を通して、本人・家族のニーズを把握している。また、静岡県のピアパートナー派遣事業を活用し、本人を招いた勉強会も開催した。	●認知症が身近ではない住民も巻き込んで活動していくため、意義や必要性に理解を得る必要があった。地域包括支援センターと連携し、「誰もが認知症になる可能性があり、いつ自分になるかわからない。認知症になっても地域で暮らし続けることができるようになるために、ぜひ一緒にやりましょう」と声をかけ続け、賛同者を増やした。	●チームの立ち上げに必要な会場費やグッズ費、有識者のセミナーやステップアップ講座等の開催費用等を負担するほか、担当者が立ち上げの検討会に出席し、ともに考えている。立ち上げ後は、各チームの主体的な運営・活動に任せているが、必要に応じてチーム員会議等に参加する。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果	●個々のチーム員から認知症へのイメージの変化として「何もわからない人ではなく、できることもある。関りを断ち切らないことが大切」といった声や、「認知症になっても地域で関わり続けていきたい」といった声が挙がり始め、「認知症にやさしいまちを目指そう」という雰囲気になってきている。
今後の展望・課題	●圏域ごとの状況に合わせて、チームを設置していきたい。そのためにも、チームオレンジの概念を普及し、新規チームの立ち上げと共に活動意欲のあるサポーターの養成に取り組み、チーム組成へと繋げていきたいと考えている。

静岡県沼津市

地域包括支援センターの取組をサポートするチームオレンジ

- 静岡県沼津市では、認知症サポーターの活躍の場として、地域包括支援センターが課題として抱えていた「認知症カフェの企画・運営等」の立役者となるべく、地域包括支援センターごとにチームオレンジを設置した。
- チームごとに活動内容は異なるが、それぞれのチームにおいて、認知症カフェの企画・運営や認知症サポーター講座、地域の団体等と連携した普及啓発活動、見守り手帳や認知症ケアパスの作成等に取り組んでいる。
- チームオレンジの活動を通して、本人の困りごと等に対して、「認知症を理解したサポーター」が入口となり、馴染みの関係の中で相談できる体制ができている。



チームオレンジかなおか



チームオレンジきくりん

基本情報

人口	19.1万人	高齢化率	32.0%
チーム数	12チーム	担当部署	市民福祉部 長寿福祉課 高齢者支援係
チームの構成	メンバー数は132名 家族、地域住民、サポーター、民生委員、生活支援コーディネーター、地域包括支援センター職員等で構成		
行政の推進体制	行政では、長寿福祉課担当者、チームオレンジ・コーディネーター、地域包括支援センター職員等が主体となり、推進。また、以下と連携している。 ・認知症地域支援推進員 ・地域包括支援センター ・地域の認知症カフェ		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

「認知症の理解促進」及び「サポーターの活躍の場」

活動内容

- チームごとに活動内容は異なるが、主に以下のような活動を行っている。
- 認知症カフェの企画・運営（認知症支援推進員とチームオレンジメンバーで共同して実施）
 - 認知症サポーター講座
 - アルツハイマーデーにあわせて「びゅうお」をライトアップ
 - 地元サッカークラブ（アスルクラロ沼津）とのQRコード模擬訓練
 - 認知症啓発のためのポロシャツ作成、HPや広報ぬまづでの啓発、youtubeへの動画投稿
 - 地元飲食店とのコラボによるデザート配達
 - ひとり親支援の子ども弁当
 - 見守り手帳（一人暮らし高齢者向け）の作成
 - 認知症ケアパスの作成

チームオレンジの設置に至ったプロセス

サポーターの活躍の場としてチームオレンジを設置

- 平成22年度から「認知症サポーター養成講座」を開始したが、養成したサポーターの活用に課題を感じていた。一方で、各地域包括支援センターにおいて、認知症カフェの企画・運営等に課題を抱えていた。それらの課題への対応として、チームオレンジを設置した。

本人・家族の関わり状況

認知症カフェや家族介護教室などに本人や家族が参加

- 認知症カフェや家族介護教室の参加者として関わっている。本人・家族のニーズは、担当ケアマネジャーや地域のケアマネジャー、介護保険サービス事業所、認知症カフェから聞き取りを行い、把握するよう心掛けている。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

チームオレンジ活動の位置付けがわかりにくい

- メンバー自身が参加している活動が何に基づき、誰が主体で、他の活動とどう違うのか等、活動の位置付けを理解できていないことがある。高齢者施策全体の中でチームオレンジをどこに位置付けているのか、明確に説明する必要がある。

行政の役割

サポーターを養成し、チームオレンジへとつなげる

- 地域包括支援センターが認知症サポーターを養成し、養成したサポーターからチームオレンジのチーム員になってくれそうな方をピックアップし、チームを運営している。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 本人の困りごと等に対して、「認知症を理解したサポーター」が入口となってくれている。専門職が最初から相談にのるのではなく、馴染みの関係の中で相談できる体制ができている。また、役所にわざわざ足を運ばずとも、認知症カフェやRUN伴等、地域住民からの声かけを受け、支援につながることもある。

今後の展望・課題

- 若年性認知症を含め、本人との関わりを増やしていきたい。地域によって認知症への理解に差があるため、どの地域でも本人が活動に参加できるように理解促進を進めたい。

静岡県藤枝市

地域のお店や事業所が立場を超えて ともに考え・実行する、認知症の人とともに 暮らしやすい地域づくりを行うチームオレンジ

■静岡県藤枝市では、本人の体験や工夫を活かし、認知症の人とともに暮らしやすいまちを考える「認知症の人とともに築く地域づくり」を認知症施策の一つの柱としている。本人同士が出会い、話せる環境づくりや、本人の声を地域に届ける本人発信支援に重点的に取り組んでおり、チームオレンジについても「本人の視点」を大切にしている。

■平成26年度から実施している「認知症の人に優しいお店・事業所認定制度」の認定店・事業所は、自分たちの仕事・役割として、日頃からそれぞれの職域の中で地域のためにできることを地域の人と考え、取り組んでいる。そのような取組が認知症の人に優しいお店や暮らしやすい地域づくりにつながり、結果としてチームオレンジとしての機能を果たしているため、認定店・事業所をチームオレンジとしている。

■活動にあたり、①今ある資源や繋がりを大切にする、②立場を超えてともに考える・立場を超えた繋がりづくり、③本人とともに地域の中で必要なつながりや資源を一緒に考えることを大事にしている。



チームオレンジ連絡会



認知症の人に優しいお店・事業所認定ステッカー

基本情報

人口	14.4万人	高齢化率	30.5%
チーム数	1チーム	担当部署	健康福祉部 地域包括ケア推進課
チームの構成	メンバーは88店・事業所 認知症の人に優しいお店・事業所の認定店で構成		
行政の推進体制	行政では、地域包括ケア推進課担当者、認知症地域支援推進員等が主体となり、推進。また、以下と連携している。 ・市内のお店や事業所		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

地域のお店や事業所が立場を超えてともに考え・実行する、認知症の人とともに暮らしやすい地域づくり

活動内容

- 平成26年からサポーター養成講座を受講した店・事業所を対象とした「認知症の人に優しいお店・事業所認定制度」を実施している。認定された「認知症の人に優しいお店・事業所」（以下、「認定店・事業所」という。）において、それぞれの職域や立場を活かし、日常的に高齢者（認知症の人を含む）の見守りや声掛け、必要に応じて関係機関と連携・情報共有等を行っている。
- また、日常的な見守り・声掛け等によって把握した本人からのニーズや店・事業所が抱える課題などを共有する機会として、定期的に認知症の人に優しいお店の連絡会を開催している。

チームオレンジの設置に至ったプロセス

既存のつながりと資源を活用

- 認定店・事業所は、職域や立場を活かし、声掛けや見守りなど必要なサポートを日常的に行っている。また、必要な機関とも連携を図り、認知症の人に限らず高齢者の暮らしを支えている。既にあるつながりや活動がチームオレンジの機能も果たしており、チームオレンジとしている。

本人・家族の関わり状況

本人の声を共有し、本人視点で暮らしやすいまちを考える

- 日頃の相談業務や本人ミーティング等で本人の声を聴き、本人とともに暮らしやすいまちを考えることを認知症施策の基本としている。本人の声を地域へ発信する取組も進めており、様々な場面で本人自ら発信する機会があり、多様な立場の人と本人の声を共有している。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

活動にあたっては、3つのポイントを大切にしている

- チームオレンジは新しい“仕組み”や“形”をつくることではないと捉え、活動にあたっては以下3つのポイントを大切にしている。
- ①今ある資源や繋がりを大切にする
- ②立場を超えてともに考える・立場を超えた繋がりづくり
- ③地域の中で必要なつながりや資源を本人と一緒に考える

行政の役割

立場を超えたつながりづくり

- 認定店・事業所の取組を共有する機会を設け、横のつながりづくりを行っている。その中で、ヘルプカードの活用事例や本人の声を共有し、認知症バリアフリーについての理解を深める取組も行っている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 認定店・事業所は、チームオレンジの冠をかぶせるから実施しているのではなく、自分ごととして取り組んでいる。そのような存在があること自体が本市の強みである。取組を通して、認定店・事業所が地域への理解を深め、領域を超えたつながりをつくることが出来ている。

今後の展望・課題

- 本人が地域の中で暮らすことで、地域における認知症の理解が深まると考えており、認知症施策推進会議では「本人の希望を叶える環境づくり」をテーマに検討を進めている。専門職の認知症の理解と先入観の解消が不可欠である。

大阪府門真市

認知症になっても輝けるまちをめざして、認知症の人が活躍する場や活動を多様な人や団体と共に創り、「認知症の人が支えられる側から地域をつなぐまちづくりの主人公へ」となるチームオレンジ

■大阪府門真市では、本人の夢を叶える道のりを伴走している「ゆめ伴（とも）プロジェクト」をチームオレンジとしている。まだまだ活躍したいという本人・家族の思いに共感した複数団体のメンバーで構成されるゆめ伴プロジェクトin門真実行委員会が中心となり、本人・家族との普段の会話から希望や得意なことを把握し、畑作業やサロン等の様々な活動の実践につなげている。

■行政も、本人・家族、そしてプロジェクトメンバーと共に活動することで、様々な声に耳を傾けニーズを拾い、施策へとつなげている。認知症の有無に関わらず、プロジェクトを担う「チームの一員」として本人が活動に参加している。それにより、本人・家族が、いきいきと楽しく過ごし、また、活動から達成感も得ている。地域住民にとっても、仲間として一緒に活動することで認知症への理解を深めるきっかけとなっている。



ゆめ伴ファームの活動の様子



ゆめ伴カフェの活動の様子

基本情報

人口	11.9万人	高齢化率	29.8%
チーム数	1チーム	担当部署	保健福祉部高齢福祉課
チームの構成	メンバー数は約100名 登録制度等は設けておらず、緩やかなつながりを大切にしている 介護保険サービス事業者連絡会、社会福祉協議会、くすのき広域連合門真支所、地域活動団体で構成		
行政の推進体制	行政では、認知症地域支援推進員である高齢福祉課担当者が主体となり、推進。 また、以下と連携している。 ・地域包括支援センター ・地域のカフェ ・地域の民間企業 ・地域の介護事業所・施設 ・地域の社会福祉協議会 ・地域のボランティア団体		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

本人や地域の高齢者が、街の中で輝きながら生きがいや楽しみ、夢が実現できるまちづくり

活動内容

ゆめ伴プロジェクトin門真実行委員会は以下の活動等を行っている。

- オレンジ夢リングプロジェクト
本人と地域の高齢者が、誰もが支え合えるまちにしたいという想いを込めて3色のゴムを三つ編みにしたリングをゆめ伴サロンなどで制作。認知症サポーター養成講座等で配布。
- 折り鶴プロジェクト
本人や地域の人が施設や自宅等それぞれの場所にしながら折り鶴を作り、それらを糸でつなげて「人のつながりを表現した折り鶴コミュニケーションアート」として様々な場所に展示。カフェや施設、スーパーなど身近な場で折り鶴づくりに取り組める通いの場「折り鶴ステーション」を実施。
- オレンジフラワープロジェクト
オレンジの花、マリーゴールドを本人や地域の人などが自宅や施設で花を咲かせることで、地域の一体感を創出している。
- ゆめ伴ファーム
本人や地域の高齢者、保育園児などが畑で一緒に野菜や綿花を栽培。世代間交流の場となっている。収穫物は郵便局に無人販売所を設けて販売。
- ゆめ伴カフェ
本人と地域の人がスタッフとしてお客様をおもてなしするカフェ。本人も企画会議に参加。

チームオレンジの設置に至ったプロセス

本人・家族の思いへの共感から立ち上げ

- まだまだ働きたいという本人の思いから「認知症になっても活躍してほしい」というご家族がいた。ケアマネジャーがその方の活躍できるカフェを作れないかと周囲に相談したところ、共感の輪が広がってゆめ伴プロジェクトが立ち上がり、本人や地域の人の声をきっかけに多様な人や団体と共に活動を展開していたためチームオレンジとした。

本人・家族の関わり状況

「認知症の人」ではなく「活動の担い手」として活動に参加

- 本人は各活動に自身の望む形で参加している。「認知症の人」ではなく「活動の担い手」として本人と地域住民、実行委員会のメンバー等が対等な立場で関わり合っており、普段の会話の中で本人の希望や得意なことを把握し、役割を担うことでやりがいを感じられるようにしている。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

認知症の人でも地域住民も共に楽しみ、感動を共有できるような場づくりの工夫

- 認知症の人だけではなく地域住民も共に楽しみ、喜びを共有し、感動を分かち合うことで「また参加したい!」という共感の輪が広がり、多様な人がつながりあうことで様々な活動組を実現していく活動展開の工夫している。

行政の役割

行政も共に活動を担う仲間になる

- 認知症の人や家族、ゆめ伴プロジェクト実行委員会のメンバーと共に活動に取り組んでいる。共に活動を担うことで、様々な声に耳を傾け、ニーズを拾い、行政施策へと繋げている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- 地域になかなか馴染めなかった本人がゆめ伴ファームに参加するようになり、いきいきと楽しく過ごせるようになるなど、本人にも変化が生じている。
- 「認知症の人の笑顔のために」という共通のビジョンのもとに多様な人や団体に新たなつながりが生まれており「認知症の人が支えられる側から地域をつなぐまちづくりの主人公」となることを可能にしている。

今後の展望・課題

- ゆめ伴プロジェクトin門真実行委員会に参画している団体以外との繋がりがなく、そうした繋がりがまだない団体との連携を図れていない状況が課題である。
- 小中学生や高校生などとも一緒に活動し、全世代型のチームオレンジを構築していきたいと考えている。

奈良県三郷町

認知症になっても参加し続けることのできる 集いの場を目指すチームオレンジ

- 奈良県三郷町では、自治会単位で設置されている「集いの場」に対して、認知症サポーター養成講座およびステップアップ講座を開催し、チームオレンジを立ち上げた。
- 日頃は、従来の集いの場の活動を継続しているが、チームオレンジとなったことで、認知症になっても、継続して参加できるように周囲がさりげなく見守る環境を整えることができた。その結果、集いの場は「認知症になっても参加し続けることができる場」として、参加者の安心感につながっている。
- チーム員はオレンジリングやチームオレンジ結成の証として配布しているバッジを身に付け、活動に対して意識的に取り組んでいる。また、本人以外のチーム員からも、チームオレンジの存在が「認知症になっても頼れる場所」として認識され新たな町の「力」として期待されている。



認知症サポーター養成講座の様子



チームオレンジの活動の様子

基本情報

人口	2.3万人	高齢化率	31.3%
チーム数	4チーム	担当部署	住民福祉部 長寿健康課 地域包括支援センター
チームの構成	メンバー数は110名 自治会単位で設置されている集いの場の参加者で構成		
行政の推進体制	行政では、長寿健康課 地域包括支援センターが主体となり、推進している。		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト	認知症の人とその家族が思いを発信できる機会づくりや、認知症の人とその家族を含む住民同士がお互いに支え合う関係づくり
活動内容	●集いの場として、既存の取組を継続している。認知症になっても、継続して参加できるよう、周囲がさりげなく見守る体制を整えている。また、行政担当者とチームオレンジ・コーディネーターが2ヶ月に1回訪問し、認知症の症状や対応に関する勉強会を開催している。

チームオレンジの設置に至ったプロセス	本人・家族の関わり状況	活動の定着に至るまでの苦労や難しさ	行政の役割
集いの場を起点として設置	本人・家族は集いの場の参加者	チームの一体感を生むグッズの配布	認知症の方の把握、チーム員との定期的な会話を行う
●生活支援コーディネーターと連携し、自治会単位で設置している「集いの場」に対して、チームオレンジ設置を提案した。チームオレンジの理念等に共感した集いの場に対して、認知症サポーター養成講座およびステップアップ講座を実施し、チームオレンジを設置した。	●本人・家族は集いの場のメンバーとして参加している。チーム員も同じく参加者として、特別なことはせず、さりげなく見守りをしている。	●元々、「認知症になっても互いに誘い合って通える環境を作りたい」という意識の高いメンバーが多く、チームとしての一体感を生むため、オレンジリングやバッジを配布したことによって、さらに意欲的に取り組むようになった。	●診断の有無に関わらず、認知症の疑いがある方を把握するようにしている。また、集いの場の代表者や家族と定期的に会話し、問題があれば相談してほしいと伝えている。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果	●チーム員がオレンジリングやチームオレンジ結成の証としてお渡ししているバッジを身に付け、意欲的に活動している。また、本人以外のチーム員からも、チームオレンジの存在が「認知症になっても頼れる場所」として認識され、安心感につながっている。
今後の展望・課題	●繋がりのない認知症サポーターと本人で新しいチームオレンジを結成しても、活動が継続しなかった。今後も既存団体にチームオレンジの結成を提案したいと考えている。

島根県松江市

「白衣を着ていない専門職」がはじめた “人とのつながりを感じられる”「ごちゃまぜ」な 場づくりを実践するチームオレンジ

■島根県松江市には、本人や家族、地域住民、医療・介護・福祉の専門職など、病気や障がいの有無・職種などに関係なく、誰でも気軽に参加できるカフェスタイルの交流の場「のあカフェ」を設置しているチームがある。

■のあカフェでは、飲食店を活用した対面での取組だけではなく、zoomを活用した交流会やLINE・Facebookを活用した相談、情報発信を行っている。

■企画・運営は、3人の専門職（薬剤師、理学療法士、社会福祉士）が中心となり担っている。参加者を“集める”のではなく、自然と“集まる”ような場づくりを心掛け、ふとした困り事が生じた際に、「白衣を着ていない専門職」や地域住民等と気軽につながることができる環境を整えている。



のあカフェの活動の様子



のあカフェの活動の様子

基本情報

人口	19.9万人	高齢化率	30.0%
チーム数	1チーム	担当部署	健康福祉部 介護保険課
チームの構成	メンバー数は約10名 薬剤師、理学療法士、社会福祉士、お店スタッフで構成		
行政の推進体制	行政では、介護保険課担当者が主体となり、認知症施策の一環として推進。また、以下と連携している。 ・地域包括支援センター（松江市が委託し、松江市社会福祉協議会が運営）		

チームオレンジの目的・コンセプト、活動内容

目的・コンセプト

病気や障がいの有無に関わらず、人とのつながりを感じられ、誰もが安心して暮らすことができる社会の創造

活動内容

本人や家族、地域住民、医療・介護・福祉の専門職など、病気や障がいの有無・職種などに関係なく、誰でも気軽に参加でき、コーヒーやデザートなどを楽しみながら、話をしたり、つながりをつくることのできるカフェスタイルの交流の場「のあカフェ」を開催している。

そのほか、LINEによる認知症相談やzoomを活用したオンライン交流会、“地域がつながる”スマホ教室、医療・介護・福祉についてのミニ講話、出前講話なども行っている。

- のあカフェ 開催日 ・昼の部：毎月第2・4週木曜日 14:30～16:30 @御食事処 御華門
・夜の部：毎月第2・4週木曜日 20:30～22:00 @ZOOM

チームオレンジの設置に至ったプロセス

ちょっとした困り事を専門職にも聞いてもらえる、人との繋がりを感じられる交流の場を開設

- ふと悩みごとや困りごとを話したり、人とのつながりを感じられる居場所に白衣を着ていない専門職がいることで、少しでも不安や孤立を解消する手助けができないかと考え、「のあカフェ」を開設した。対象は認知症に限らないが、行政からの働きかけによってチームオレンジとしても活動し始めた。

本人・家族の関わり状況

認知症に限らず、「ごちゃまぜ」なつながり

- 認知症に限らず、多様な方々に参加してもらうことでできる「ごちゃまぜ」なつながりを大切にしている。活動にあたって、病気や障がいの有無などをあえて確認していない。本人・家族などから個別に相談を受けた場合には、一緒に何ができるかを考え、ともに取り組んでいる。

活動の定着に至るまでの苦労や難しさ

参加者を“集める”のではなく、自然と“集まる”場づくり企業・医療機関との連携には行政のサポートが必要

- 当初、参加者の少なさや本人・家族との関わりがないことに悩み、人を集めることばかり考えていた。今では、参加者を“集める”のではなく、自然と“集まる”ような場づくりを心掛け、実践している。
- 関係機関との連携にあたり、最初の関係性づくりが難しく、行政がその橋渡しをしている。

行政の役割

本人への取組紹介やステップアップ講座・認知症カフェに関して助言

- 地域包括支援センターや初期集中支援チーム等が把握した本人にのあカフェを紹介する他、必要に応じてステップアップ講座の内容や認知症カフェの運営等に関して助言している。

取組の成果、今後の展望・課題

これまでの取組の成果

- この取組を通じて、“認知症”に限らず、幅広い世代の仲間づくりができ、交流できる場が生まれた。本人や家族からの相談に対して、それぞれの困りごとや悩みを聞くだけでなく、その人の活躍でき得る場所を紹介できるようになった。【のあカフェ】

今後の展望・課題

- チームオレンジの活動の周知を積極的に行い参加者増に繋がると共に、チームとの関わりを通じて本人や家族との接点も増やしていきたいと考えている。【行政】
- 今までどおりの暮らしが継続できるよう、診断前後の空白期間に対して、医療機関と連携したシームレスな支援を実施していきたいと考えている。【のあカフェ】

第2章 活動のヒント

「はじめに」でも記載の通り、第2章「活動のヒント」では、行政の担当者がチームオレンジの整備を進めていく際に、疑問に思うこと、不安に思うことについて、ヒントとなる考え方や知恵を整理しています。

Q 本人の思いを反映した活動をするためにはどのような工夫をすると良いですか？

→ P46

Q 地域住民等にチームオレンジに参加してもらうためにはどのような声掛けや説明をすれば良いですか？

→ P47

Q チームオレンジの活動を進めていくにあたって「誰」や「どこ」と連携すれば良いですか？

→ P48

Q チーム員にはどのようなことを学んでもらうと良いですか？

→ P49

Q チームオレンジの活動の中で生じる個人情報はどうに取り扱うべきですか。

→ P50

Q チームオレンジの整備にあたって都道府県はどのような役割を果たせば良いですか？

→ P51

Q チームオレンジを設置している市町村の担当者やチーム員はどのような思いで取り組んでいるのですか？

→ P52



Q 本人の思いを反映した活動をするためには どのような工夫をすると良いですか？

A 本人の思いを反映した活動を実践している市町村の多くは本人の声をしっかりと聞き、その声を活動につなげています。

また、チームオレンジを「何を言っても大丈夫な場所」だと本人に伝えることで、本人がやりたいことや困りごとについて発言しやすくしている事例もあります。

なお、本人の意思や希望は変わりうるため、定期的に確認することも必要です。

本人がどんな暮らしをしたいか、そこを起点にチームオレンジを作り上げることが重要です。

愛知県 瀬戸市 本人や家族、 現場を見ている方の声をしっかりと聞く

瀬戸市では、本人や家族、現場を見ている地域支援推進員等と協議し、オレンジサポーターとどうしたらよいか、一緒に考えて進めることを重視している。また、各活動の前には、事前打ち合わせと振り返りを必ず行い、活動に参加しているオレンジサポーターの意見を丁寧に確認し、次回以降の活動内容を一緒に検討している。

参考 愛知県瀬戸市の取組→P12

東京都 清瀬市 本人の得意なことや好きなことを 引き出し、さりげなく役割を担ってもらう

清瀬市では、本人の得意なことや好きなことをチーム員である住民が上手に引き出し、本人にさりげなく役割を担ってもらうことで活動の幅を広げている。例えば、囲碁が好きな本人がいたので、囲碁を用意してチーム員が教わるようになったり、本人との何気ない会話の中から、英語教師だったことを聞き出し、そこから英語で歌を歌うイベントを開催したりしている。

参考 東京都清瀬市の取組→P10

千葉県 千葉市 「本人ミーティング」を企画することで 話しやすい雰囲気を作る

千葉市でチームオレンジの活動の一環として運営している「Greenカフェ」では、参加している本人がやりたいことや困りごとについて話しやすい雰囲気を作るため、「やりたいことをみんなで言い合う日（本人ミーティング）」を企画した。それにより、「花が好きで育てたいが、家では育てることができず寂しい」といったこれまでの認知症カフェ等では聞けなかった本人の想いを聞くことができ、それを認知症カフェの活動とすることで実現することができるようになった。

参考 千葉県千葉市の取組→P22

Q 地域住民等にチームオレンジに参加してもらうためには どのような声掛けや説明をすれば良いですか？

A チームオレンジのメンバーになってほしいと頼むのではなく、できることややってみたいことを考えてもらうような声掛けを行っている事例もあります。

また、面談やメンバーを集めた話し合いを繰り返し行っている事例もあります。

静岡県 藤枝市 チームオレンジのメンバーになってほしいと 頼むのではなく、すでにある強みを活かす

藤枝市では、「チームオレンジは新しい“仕組み”や“形”を作るのではない。」との考え方を大切にしている。そのため、地域の企業等に対して、チームオレンジのメンバーになってほしいと頼んでいない。自分たちの仕事・役割として、自分たちの職域の中で地域や地域のためにできることに取り組んでいる。そのような取組が認知症の人に優しいお店や暮らしやすい地域づくりにつながり、結果としてチームオレンジとしての機能を果たしている。

参考 静岡県藤枝市の取組→P34

静岡県 静岡市 「たとえ自分が認知症になっても地域で暮らし 続けることができるようにするため、 ぜひ一緒にやりましょう」と声をかけ続ける

静岡市では、まだ認知症を身近に感じたことがない住民も一緒に巻き込んでチームオレンジをつくりあげていくため、その意義や必要性に理解を得ることが一番の課題であった。地域包括支援センターと連携し、「誰もが認知症になる可能性があり、いつ自分になるかわからない。認知症になっても地域で暮らし続けることができるようにするため、ぜひ一緒にやりましょう」と声をかけ続けることで、賛同者を増やしていった。

参考 静岡県静岡市の取組→P30

神奈川県 平塚市 チームオレンジメンバーとの 話し合いを繰り返し行う

平塚市では、既存のボランティアの仕組み（町内福祉村等の地域の団体）を起点としたチームオレンジの育成に取り組んでいる。取組開始当初、今日からチームオレンジのメンバーだと、ボランティアメンバーに伝えても、従来の活動と何が違うのかが上手く整理できていない様子であった。そこで、認知症地域支援推進員が中心となり、認知症カフェ等の開催後の時間を利用した話し合いやメンバー交流会等を重ねてきた。それにより、チームオレンジの活動の目的や意義について共通認識を持てるようになってきている。

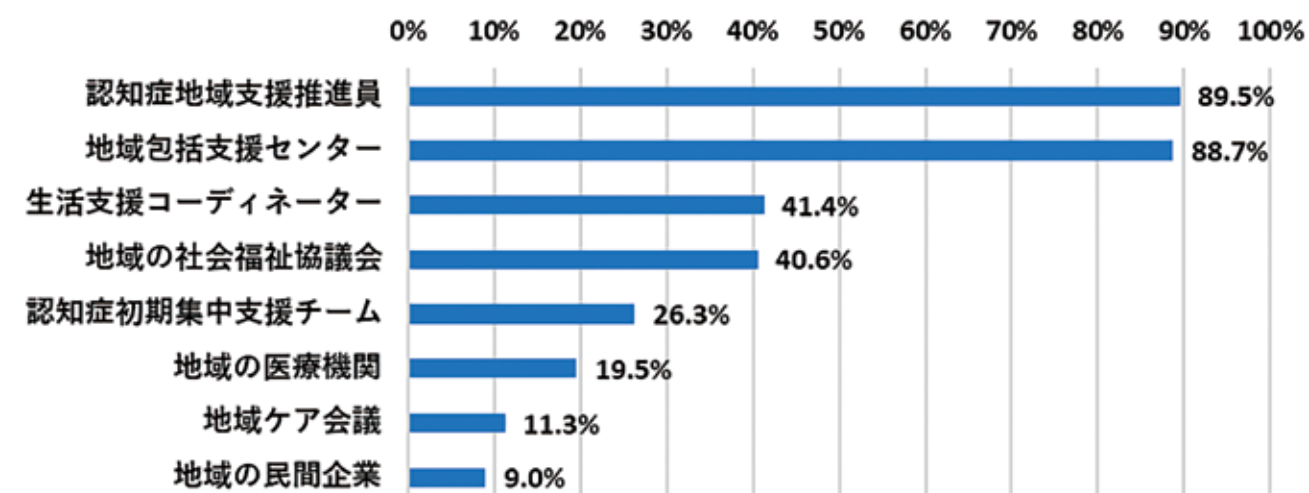
参考 神奈川県平塚市の取組→P24

Q チームオレンジの活動を進めていくにあたって「誰」や「どこ」と連携すれば良いですか？

A チームオレンジを設置済みの市町村では認知症地域支援推進員、地域包括支援センターと連携しているケースが多くなっています。

また、生活支援コーディネーターや認知症初期集中支援チーム等と連携している事例もあります。

チームオレンジの設置にあたって連携した社会資源（n=133）



静岡県 認知症地域支援推進員、生活支援コーディネーターとの連携

静岡市では、地域包括支援センターに認知症地域支援推進員が配置されており、チームの立ち上げには必ず推進員が関わることから、地域ケア会議等で把握した地域課題をチーム活動に繋げやすい仕組みとなっている。また、生活支援コーディネーターがチームの立ち上げ段階から関わっているチームでは、チーム立ち上げ後も、チーム活動で把握した支援ニーズを、地域の他の支え合いに繋げることが可能。

参考 静岡県静岡市の取組→P30

群馬県 初期集中支援チーム等との連携

玉村町では、初期集中支援チームが対応した本人にチームオレンジの活動を紹介している。また、「認知症・介護予防」・「生活支援体制整備」は、対象者や活動内容に重なりがあり、どの分野にも繋がっているため、介護予防に関する活動の場でサポーター養成研修の紹介をする等、一体的な取組を行っている。

参考 群馬県玉村町の取組→P6

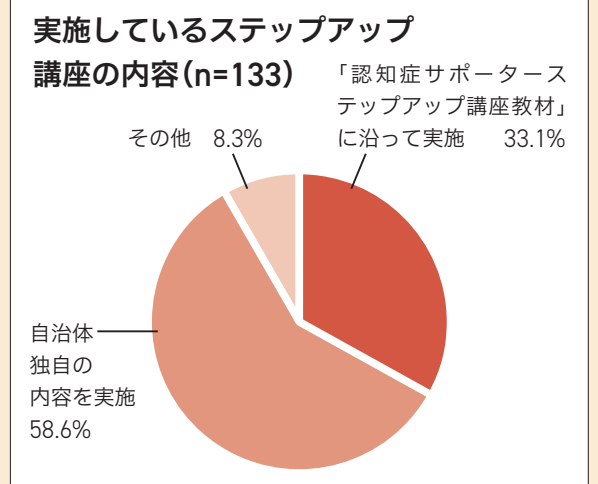
Q チーム員にはどのようなことを学んでもらうと良いですか？

A 厚生労働省の「認知症サポーター等養成事業実施要綱」では、ステップアップ講座の研修内容・時間について、「認知症サポーターが目指す実際の支援活動の内容に応じて、以下の具体例等を参考に、各地域の実情に応じて、具体的な研修内容や時間を設定すること」とされています。

実施要綱における具体例

- チームオレンジの意義や役割の理解に関する講義
- 認知症の基礎知識・理解をさらに深めるための講義
- 認知症の人への接し方のロールプレイングや認知症の本人の話などを聴くなど座学以外の実習や演習
- 個人情報、プライバシーへの配慮に関する講義
- 意思決定支援に関する講義
- チームオレンジで活動するために必要な知識、対応スキル等の取得に関する講義、実習、演習等

A チームオレンジを設置済みの市町村の状況としては、「全国キャラバン・メイト連絡協議会発行の『認知症サポーターステップアップ講座教材』に沿って実施している」が約3割、「自治体独自の内容を実施している」が約6割となっています。



自治体独自の内容として、以下のような事例があります。

北海道 認知症の人の気持ちを体験するためのグループワーク

北広島市では、グループワークを中心としたステップアップ講座を実施。認知症の人の気持ちを体験するため、受講者二人一組にキャラバン・メイトがファシリテーターとなり、よくある3つの場面から認知症の人への対応を実践している。(H29～R1)

参考 北海道北広島市の取組→P16

大阪府 認知症の人との時間を共有することで理解を深める

門真市では、グループホーム等を会場にしたり、オンラインでつなぐなどして認知症の人との時間を共有し、認知症への理解を深めている。また地域包括支援センター職員と協力して、毎年、内容に工夫をこらして実施している。

参考 大阪府門真市の取組→P38

Q チームオレンジの活動の中で生じる個人情報はどうに取り扱うべきですか。

A 取り扱いに関するルール等を定めるとともに、同意書等を用いて、関係者への周知を図ることが望ましいと考えられます。

ステップアップ講座の中に、個人情報の取り扱いに関する講義を盛り込んでいる事例や取り扱いに関するルールを実施要綱等に明記している事例等もあります。

群馬県 玉村町 ステップアップ講座の中に、個人情報の取り扱いに関する講義を盛り込むとともに、同意書を作成

玉村町では、ステップアップ講座の中で、個人情報の取り扱いについての講義を行い、注意事項や厳守する事項を伝えている。また、活動時にはチーム員・本人・家族から同意書を取得している。

参考 群馬県玉村町の取組➡P6

玉村町チームオレンジ（様式 1）

_____様

チームオレンジ活動参加及び個人情報取り扱い同意書

わたしはチームオレンジの活動に参加します。

活動を行うにあたり個人情報の適切な取り扱いについて十分に理解し、これを遵守すると共に、活動を中止した後においても、活動上知り得た個人情報を、正当な事由なく第三者に漏らしません。

令和 年 月 日

氏名 _____

住所 玉村町大字 _____

連絡先 _____

※この同意書で得た情報については、必要な範囲でチームオレンジの活動に関わる関係者（玉村町、玉村町地域包括支援センター等）に提供し、必要に応じて関係機関等に提供し、必要範囲で本人に関する情報を提供することに同意します。

チーム活動メンバー同意書

玉村町チームオレンジ（様式 2）

_____様

個人情報使用についての同意書

「チームオレンジスマイルプラン」に基づいた活動で、オレンジサポーターと共に行うにあたり、以下の件について同意します。

- 玉村町地域包括支援センターが、私が希望する活動を共にするため、オレンジサポーター、地域サポーターなど、必要な範囲で支援する関係機関と、本人に関する情報を共有することに同意します。
- 活動中に、けがや事故等問題が発生した場合、すみやかに家族や警察等関係機関に連絡し、必要な範囲で本人に関する情報を提供することに同意します。

令和 年 月 日

本人氏名 _____

家族氏名 _____

（印刷）

本人同意書

島根県 浜田市 個人情報の取り扱いに関するルールを実施要綱に明記

浜田市では、認知症サポーター活動促進事業実施要綱において、個人情報の保護に関する法律及び浜田市個人情報保護条例の遵守に触れ、チームオレンジの立ち上げの際に確認している。

参考 島根県浜田市の取組➡P14

Q チームオレンジの整備にあたって都道府県はどのような役割を果たせば良いですか？

A 「県が考えるチームオレンジ」を明確にし、オレンジ・チューター等を通じて、市町村に伝えている事例があります。

また、チームオレンジに関する活動事例集の作成やオレンジ・チューターの養成等を通じて、市町村の活動のバックアップをしている事例もあります。

埼玉県 「埼玉県が考えるチームオレンジ」を整理し、市町村に伝達

埼玉県では、「埼玉県が考えるチームオレンジ」を整理し、県が養成したオレンジ・チューター等が、県内の市町村にその内容を伝えている。また、ステップアップ講座について、独自の埼玉県版テキストを作成・活用することで、県内の市町村が共通の理念や目的意識をもってチームオレンジの整備に臨めるような環境整備を行っている。

埼玉県が考えるチームオレンジ

- ① 認知症の人や家族の困りごと（ニーズ）を把握し、継続して支援ができる体制づくりが求められます。
- ② 認知症の人とその家族もチームの一員となることが望ましいと言えます。また認知症の人がチームに参加するにあたり「本人が活躍できる、居心地が良い・安心できる場」であることが必要とされます。
- ③ 認知症の人・その家族・支援者は、常に対等な関係になることが大切です。「支援する人、される人」の関係を超越して、チームオレンジによる支え合いの地域共生社会を目指していきましょう。

「認知症サポーター ステップアップ講座 <埼玉県版テキスト>」P1（埼玉県、2022）

認知症サポーター ステップアップ講座

<埼玉県版テキスト>

チームオレンジによる
支え合いの地域共生社会をつくらう！

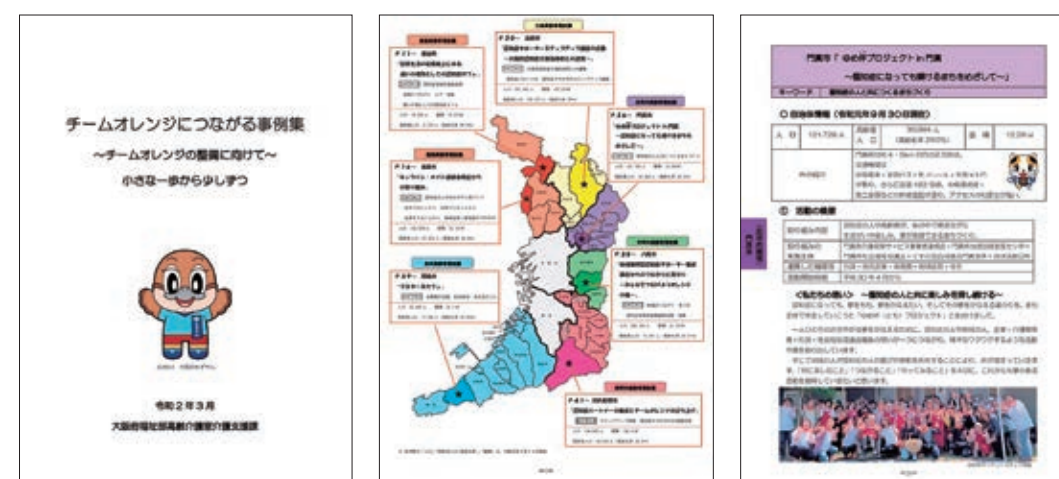


埼玉県マスコット「こぼれんぼさん」

埼玉県
令和4年3月版

大阪府 活動事例集の作成

大阪府では、府内の市町村でのチームオレンジの整備や活動の参考となるよう、活動の理念やチームオレンジにつながる活動に関する事例集を作成している。



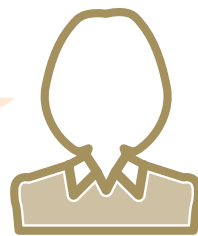
Q チームオレンジを設置している市町村の担当者や
チーム員はどのような思いで取り組んでいるのですか？

**チームオレンジに実際に取り組んでいる
市町村の担当者やチーム員等からは
以下のような声が挙がっています。**

当初は「チームオレンジを作らなければいけない」ということに
気持ちが向いてしまい、どのような活動をすればよいか悩んでいた。
しかし、チームを作ることとせず、「チームオレンジが何のため
にあるか」を考えることが大事だと気付いた時に、現在の活動の形
が見えてきた。チームオレンジはまず何かをやってみる、動いてみる
ことで、徐々に道が開けて、次にやるべき事が見えてくる非常に
面白い事業である。

地域の認知症サポーターの多くは何かをしたいとの思いでうずうず
している。認知症サポーターの方々のパワーを信じ、一緒に活動
していくことが大切だと思う。

参考 愛知県瀬戸市の取組→P12

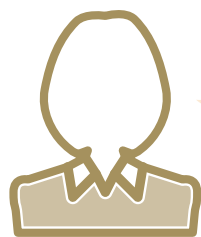


瀬戸市認知症
地域支援推進員

「今ある人や資源や繋がりを大切に。チームオレンジは新しい
“仕組み”や“形”をつくることではない。」「立場を越えてともに
考える。立場を越えた繋がりづくり。」「本人の求める地域や支援の
在り方を共有しよう！本人とともに必要な繋がりや仕組みを考える！」
を特に大切にしながら日々の活動を進めている。

チームオレンジの活動は、「誰かに頼まれたから」とか「チーム
オレンジという制度があるから」といった理由で始まるものではなく、
本人と一緒に過ごすことにより、本人の周りに自然派生的に生じる
ものであると考えている。「本人の“ために”」から「本人と“ともに”」
へと考え方を転換することが重要であると思う。

参考 静岡県藤枝市の取組→P34

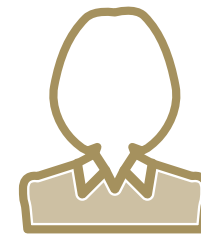


藤枝市担当者

チームオレンジの活動を開始して本当によかったと感じている。
活動をきっかけに、本人・家族、地域住民が仲間になり、チーム
オレンジの活動日以外でも一緒に出かけたり、食事に行ったりする
こともあり、支援する側・される側を超えた共生の地域づくりが実践
されていると日々実感している。

一部のチーム員は活動当初、認知症の人と一緒に活動することに
対して「なんとなく怖い」という気持ちがあったようである。しかし、
活動を通じてチーム員や職員も活動を楽しむようになり、意識も大きく
変わった。チームオレンジは、地域づくりという点でも取り組む意義
が大きいものであると思う。

参考 東京都清瀬市の取組→P10

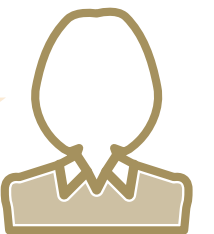


清瀬市担当者

本人と家族がチームオレンジを介して地域と繋がり、「この地区に
住んでいて良かった」と感じてくれることが、行政がチームオレンジ
を設置する意義であると思う。本人を中心に地域の住民が繋がること
で、お互いが助け合うきっかけとなり「助け合える地域づくり」や
「安心して暮らせる町づくり」にもつながる。

本人がとても楽しそうにいきいきと、前向きに取り組んでいる様子
を見るとチームオレンジの活動を開始してよかったと思う。本人は
「いつもの仲間と一緒に活動できるのが嬉しい」と話している。サポー
ターには、「いつ自分も認知症になるか分からない」「お互い様」と
いう考え方を大切にしてもらっている。

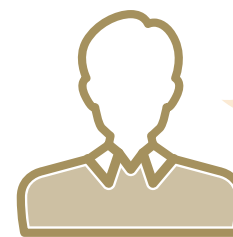
参考 群馬県玉村町の取組→P6



玉村町担当者

オープン当初、参加者が少なく、本人や家族ともなかなか関わる
ことができず悩むことが多かった。最近、ある本人から「認知症の
有無に限らず、楽しくないところには誰だって行きたくないよね？」
と言われたことが、非常にしっくりきた。どうやったら本人に参加
してもらえるかを議論している取組も多いと思うが、本人が参加したい
と思えることを大切に、ゆったりと安心できる居場所をつくる
ことを意識している。この場が地域にあり続け、本人を含めた地域の
人が、ふと悩みごとや困りごとを話せる居場所を、そして、人との
つながりを感じられる居場所を、今後もつくっていききたい。

参考 島根県松江市の取組→P42



島根県松江市
「のあカフェ」代表者

～認知症バリアフリー社会実現に向けて～

経済団体、医療・福祉団体、自治体、学会等が連携し、取組みを推進するため設立された「日本認知症官民協議会」のもと、認知症バリアフリー社会の実現に向けて諸課題を整理し、その解決に向けた検討を実施する「認知症バリアフリーワーキンググループ」、認知症当事者や支え手の課題・ニーズに応えるようなソリューションの創出と社会実装に向けた議論を実施する「認知症イノベーションアライアンスワーキンググループ」が設置され、認知症の人ご本人やその家族の意見を踏まえつつ、認知症バリアフリー社会の実現に向けた取組を進めています。

- 日本認知症官民協議会
<https://ninchisho-kanmin.or.jp/>
- 認知症バリアフリーワーキンググループ
<https://ninchisho-kanmin.or.jp/barrierfree.html>
- 認知症イノベーションアライアンスワーキンググループ
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ninchisho_wg/index.html



令和4年度 厚生労働省 老人保健健康増進等事業 「チームオレンジの整備促進に関する調査研究」委員会

委員名簿（50音順・敬称略）

氏 名	所属・役職
鬼 頭 史 樹	名古屋市北区西部いきいき支援センター
小 村 克 宏	大阪府 福祉部 高齢介護室 介護支援課認知症・医介連携グループ 課長補佐
齊 藤 道 子	群馬県玉村町健康福祉課 高齢政策係（地域包括支援センター）
永 島 徹	NPO法人 風の詩 代表
花 俣 ふみ代	公益社団法人認知症の人と家族の会 副代表理事・埼玉県支部代表
藤 田 和 子	一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ 代表理事
◎堀 田 聰 子	慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 教授
松 原 智 文	特定非営利活動法人地域支え合いネット 理事

◎＝委員長

事務局：株式会社日本総合研究所

令和5年3月